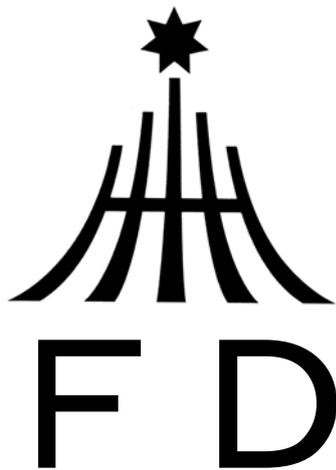


平成19年度北海道医療大学FD合宿研修報告書

導入教育を設計する

北海道医療大学FD委員会



平成19年度北海道医療大学FD合宿研修報告書

導入教育を設計する

主 催 北海道医療大学・FD委員会

期 日 平成19年9月22日(土) - 23日(日)
場 所 ないえ温泉ホテル北乃湯

タスクフォース

東城庸介	花岡真佐子	及川恒之
国永史朗	花淵馨也	長田真美

目次

はじめに	1
趣旨など	2
参加者名簿	3
進行予定	5
ワークショップのプロダクト	13
グループ名簿	14
Aグループ（「アビちゃん」）プロダクト	15
Bグループ（「はまなす」）プロダクト	19
Cグループ（「ハイパーグループC」）プロダクト	25
Dグループ（「ひぐらし」）プロダクト	36
Eグループ（「E天気」）プロダクト	47
参加者感想	59
タスクフォース感想	62
アンケートなど集計	65
プレアンケート集計	66
ポストアンケート：ワークショップの総合評価集計	78
資料	86
アルバム	94

はじめに

F D委員長 阿部和厚

今日、18才人口の減少、大学全入時代を迎え、本学は、大学の特色・ブランド力、大学力を全国の中で明確にしていくために、全学的・統合的な視点で教育改善を重点的にすすめ、教育力向上を図る必要があります。教育力向上には、本学の生き残りがかかっています。これには、全学的取り組みが必要です。おりしも、松田一郎学長は、平成19年度に全学的・統合的な視点で教育改善を進めていく組織体制として、「大学教育開発センター」を設置することにし、センターは6月に発足しました。

センターの業務は、F D委員会の仕事と一致します。

F D委員会では、これまでF D合宿を実施し、そこでは毎年いくつもの素晴らしい授業が提案されてきました。しかし、現行の教育体制では、新しい授業を入れるには規程を改定しなければなりません。これでは、新しい授業を実施し、毎年のように教育を進化させていくことはできません。また、特色G P採択の地域連携教育と関連して、全学的な視点で魅了ある授業を多く開講し、全学共通の教育を活性化させる必要性も提起されました。しかし、これも本学のこれまでの体制では、実現が困難でした。F D委員会の活動が、教員の意識改革に結びついたとしても、全学の教育改善に形としては表れてきません。F D活動をつづけていくなかでのフラストレーションとなっていました。

このなかで、「大学教育開発センター」を設置するという松田学長の声は、本学の未来、教育の活性化、教育力向上へ大きな天恵のように響きました。

本学では、各学部ともに学部卒業時あるいは大学院修了時に、国家試験あるいは資格試験があります。この合格率は、学生確保、そして大学の存続にかかわるでしょう。試験対策があるとしても、そのみでは不十分です。これには、入学時からの教育の手当が必要です。大学生だから、自主性にまかせましょうという教育姿勢では、今日の大学はもはや成り立ちません。

とくに、導入教育、初年時教育はその後の人間教育、専門教育の成果に反映し、国家試験・資格試験の合格率を左右するとみなされます。

「大学教育開発センター」発足にあたって、さっそくF D合宿のテーマに「導入教育を設計する」をとりあげることにしました。タスクフォースには、F D委員のみならず、センターの専任教員の国永教授、花淵准教授も加わり、いつものように活発な交流から、適正な成果がでてきました。うれしいことは、これらの成果は、まとめると、本学の導入教育マニュアル、あるいは資料集ともなります。ここには、本学の教育の生き生きとした未来が現れています。参加の皆さんの貢献は大きく、まとめ役としては、大きな喜びです。みなさんありがとうございました。

全学部の教員が等しく責任をもつ全学教育は、平成21年度からは、まず現行の教育体制の再編からはじまります。ここに導入教育がしっかりと位置づけられ、教養教育には様々な授業が展開されるようになるでしょう。さらに、医療福祉系大学を特色づける各学部にも共通の教育も進歩することを願います。

本学の将来を担う教育は、本学の教員のひとりひとりの意識にかかっています。そして、実際に形になる行動として現れる必要があります。

趣旨など

平成19年度FD合宿研修

メインテーマ：導入教育を設計する

主催：北海道医療大学（FD委員会）

期日：9月22（土）・23日（日）：1泊2日

場所：ないえ温泉ホテル北乃湯

プロデューサー：松田 一郎

ディレクター：阿部 和厚・

タスクフォース：グループチューター：東城庸介、花岡真佐子、及川恒之、国永史朗、花淵馨也

タイムマネージャー：長田真美 花淵馨也

事務：飛岡 範至、水野 誠、嵯峨由紀美

趣旨

今日、大学は、入学定員数が受験者数を上る大学「全入」時代を迎えることになったといわれています。これによって、入学生は多様化し、大衆化が進んでいます。また、入学生の質、学力の低下が深刻な問題となっています。そのため、多くの大学は、初年次教育、導入教育に力を入れています。大学教育の成功は、初年次教育、導入教育の成功にかかっているとさえいわれています。

本学は、入学生に対して卒業時に国家試験、資格試験に合格する学力を保証する責任があります。国家試験の合格率は、初年次教育、導入教育にもかかっているといえます。そして、大学は、卒業後も、知の創造、社会の発展に大きく貢献できる人材の育成も使命となります。本学の将来を展望するさいに、導入教育は学部に通じるきわめて重要な課題です。そして、このような学生を前にして、教育力向上へむけて各教員は大きく変わる必要もありあます。

この研修では、入学生の多様性、学力に焦点をあて、卒業時の学力保証へ向けての初年次教育、導入教育を考え、設計します。

作業目標

- 1) 学生を知る：入学生の多様性、学力を解析する。
- 2) 導入教育の目標を知る：導入教育の要素を整理し、学習目標を具体化する。
- 3) 種々の導入教育の方法を知る。
- 4) 授業設計法を知る：種々の導入教育を設計する。
- 5) 教員の教育向上の意識変化を促す方法を知る。

研修形態

- 1) 体験型研修とする。
- 2) ミニレクチャー、グループ作業、討論を繰り返す。
- 3) 小グループ学習方式の研修とする。
- 4) 普段着で肩書きなしの対等な意見交換をする。
- 5) 建設的意見交換から、建設的教育改善方策を生み出す。

平成19年度FD合宿研修参加者名簿

*氏名：職名順/ア行順/敬称略

所属(学部・学科等)	職名	氏名	専門領域等	備考	
プロデューサー	学長	松田 一郎			
薬学部	教授	富樫 廣子	薬理学(病態生理学)		
	准教授	二瓶 裕之	人間基礎科学(情報科学)	大学教育開発センター兼任	
	准教授	村井 毅	生命物理科学(薬品分析化学)		
	講師	大澤 宣明	分子生命科学(免疫微生物学)		
	講師	山田 康司	創薬化学(医薬化学)		
	助教	居弥口 大介	生命物理科学(薬品物理化学)		
	助教	町田 拓自	薬理学(薬理学)		
歯学部	教授	田隈 泰信	口腔生物学系(生化学)		
	教授	●東城 庸介	口腔生物学系(薬理学)	FD委員	
	教授	中山 英二	生体機能・病態学系(歯科放射線学)		
	教授	三浦 美英	生体機能・病態学系(歯科麻酔科学)		
	准教授	久保 勘二	教養教育学系(人間基礎科学)		
	講師	磯貝 恵美子	口腔構造・機能発育学系(保健衛生学)		
	講師	大西 隆	生体機能・病態学系(歯科放射線学)		
	講師	林 一夫	口腔構造・機能発育学系(矯正歯科学)		
	講師	松本 大輔	口腔構造・機能発育学系(小児歯科学)		
	助教	根津 顕弘	口腔生物学系(薬理学)		
	看護福祉学部 (看護学科)	教授	倉橋 昌司	生命基礎科学	大学教育開発センター兼任
教授		齋藤 いずみ	母子看護学		
教授		●花岡 真佐子	実践基礎看護学	FD委員	
准教授		伊藤 道子	母子看護学		
助教		明野 伸次	実践基礎看護学		
助教		内ヶ島 伸也	地域保健看護学		
(臨床福祉学科)		講師	丹野 和子	医療福祉臨床学	
(人間基礎科学)		講師	鎌田 禎子	人間基礎科学(英語)	

心理科学部 (臨床心理学科) (言語聴覚療法学科)	准教授	漆原 宏 次	学習心理学・実験心理学	
	准教授	河合 祐 子	臨床心理学・カウンセリング	
	准教授	富家 直 明	臨床心理学・行動医学	大学教育開発センター兼担
	准教授	堀内 ゆかり	発達臨床心理学・発達相談・教育相談	
	教 授	◎阿部 和 厚	解剖学・組織学・高等教育学	FD委員長/開発センター長
	教 授	●及川 恒 之	分子細胞生物学・再生医学	FD委員
	教 授	酒井 昇	鼓膜形成術・気道形態学	
	准教授	榊原 健 一	音声学・音響学	
	講 師	川崎 美 香	言語聴覚障害学	
	助 教	木村 未 可	言語聴覚学	
歯科衛生士専門学校	専任教員	●長田 真 美		FD委員/開発センター兼担
大学教育開発センター	教 授	●国永 史 朗	人間基礎科学 (生物学)	
	准教授	●花 潤 馨 也	人間基礎科学 (人類学)	
【計】 39名				

【備考】◎・・・ディレクター ●・・・タスクフォース

事務担当	学務部長	飛岡 範 至	
	学務部次長兼教務課長	水野 誠	
	学務部教務課大学開発センター担当	嵯峨 由紀美	

【備考】研修参加者：30名（ディレクター、タスクフォース等を除く）

進行予定

9月22日(土)

8:20 あいの里 受付 阿部・及川・東城
名札 バス座席表 ファイル クリップボード

8:30 あいの里キャンパス バス出発

8:50 当別 受付 花岡・国永・花渚
名札 バス座席表 ファイル クリップボード

9:00 当別キャンパス バス出発

司会：花渚

阿部 挨拶

拉致監禁型、ワークショップ型、

FD フロッピーディスク フレンドリードリンク

教育改善のための 組織的とりくみ(研究力・管理運営力も)

FDの義務化 大学院教育 学部教育

初めての参加が多い

初めての方には、本当は カリキュラム設計のワークショップ必須
授業法

授業科目は 担当教員のものでなく、組織に属している
学生のためのもの

花渚 自己紹介

FDはワークショップ型が効果があるといわれています。

ワークショップは 職人があつまり互いに協力してワークして

ショップする・・・＝プロダクトを出す。今回も単なる勉強で
なく使えるものをつくります。

それには、互いにうちとけて、お互いにもっているものをさ
らげだし、共同作業

アイスブレイキング・氷を溶かす・とける・まざるが重要

ということで 自己紹介(ひとり1分でも 40人で40分)

1-2分程度で 名前 所属、動機・心境・期待面白いもの歓迎
それから肩書きなしで

名簿 バス座席表をみながら

肩書きなしに、自由に意見を出し合う。

「さん」 づけで呼ぶことにしよう。

では、タスクフォースの・・・から

到着直前

到着後すぐのオリエンテーション

建物の図をみせながら

集合、荷物おく、写真 部屋は . . .

.

10:10 ないえ温泉ホテル北乃湯 到着
記念写真 阿部のデジカメ 会場設営 (事前にできないか) (設営図)

10:20 東城 司会 開会
松田学長 講話 20分

10:40 東城 オリエンテーション 5分
2日間の流れの説明
ワークショップ 7回 それぞれ プロダクトを記録 → 提出 → 報告書
タスクフォースは 各グループで 作業の指導 グループワークにも参加
リーダー リード すべてのグループ員から意見を出させ、作業に参加させる
作業のゴールを共有し、プロダクトへむけて 作業進行
時間の管理 進行時間を計画 進行 発表時間に間に合うように

10:45 阿部 ミニ講義:「導入教育とは」 資料1 25分
生徒と学生
導入 初年次
授業法
5分質疑

11:15 花岡 5分
これから幾つかのワークショップ=小グループ学習法の体験
=導入教育に使える方法
グループ形成 と グループ名 10秒自己紹介
グループ名 グループ名紹介 ABCDEをいれた名前

11:20 国永 WS1「学生を知る:入学生の多様性、学力を解析する」
グループワーク40分 (時間は短い、まず、グループワークお試し)
入れたからには100%国家試験・資格試験に合格させる責任がある しかし..
どんな 学生は学修上 どんな問題があるか
学習習慣 学力 論理的思考力 文章能力 学習行動
資質..
グループ と 個々 チームワーク
タスクフォース
グループワークの準備
リーダー・発表者・記録者:グループワーク進行用 報告書提出用

発表用資料作成 (OHP) (原則として OHP
コンピューターであると 役割固定することあり
ワークショップごとに役割を変える

KJ法ではじめる

12:00 国永 発表20分 (各 3分発表 1分討論)

12:20 昼食

13:20 ミニシンポ:各学部での導入教育的対応

花岡 司会 まとめ

富樫・二瓶 「薬学部」 13分 + 2分質疑

東城 「歯学部」 13分 + 2分質疑

鎌田 「看護福祉学部」 13分 + 2分質疑

及川 「心理科学部」 13分 + 2分質疑

総合討論 10分 まとめ 5分

14:25 WS2:「導入教育の目標設計」

阿部 ミニミニレクチャー 目標表現と評価 資料2 10分

シラバスフォーマットにもとづき説明

概要

目標 一般目標

行動目標

観察可能な動詞で

領域 (認知 = 知識

情意 = 態度 習慣

精神運動 = 技能

レベル

目標 は 学生を主語に表現

評価は 目標の達成度

目標により様々な評価法

形成評価・・・必須

総括評価

14:35 グループワーク 授業テーマ 目標 50分
 個別テーマ 2 少人数クラス 大人数クラス
 医療系統合テーマ 2 少人数クラス 大人数クラス
 文章指導 1 少人数クラス・大人数クラス 両者

授業題目名

概要(説明)

目標 一般目標

行動目標

15:35 休憩15分 コーヒー

15:50 花瀨 司会 発表 30分 (各 3分発表 1分討論)

16:10 WS3:「導入教育の方法設計」

阿部 ミニミニレクチャー 方略 ・ 評価 10分

目標達成までの 学習設計

順次性

形成評価 → 総括評価

種々の成績評価法 と 評価する領域

総括評価設計図 (ある科目の成績を評価する場合、事前に何を評価するか計画を立てる=評価の blue print)

16:20 グループ作業 50分

17:10 入浴・散歩タイム 40分

18:30 夕食

19:30 WS4:「導入教育の評価 設計」 20分

19:50 及川 司会 発表 40分 (各6分発表 2分討論)

20:30 懇談会 翌日のグループ

東城 司会 授業中の帽子への対応 指導

飲食

9月23日(日)

7:30 朝食

8:30 集合 司会 国永

8:40 WS5 導入教育の授業設計 自由な発想 60分

9:40 司会 国永 発表 40分

10:20 休憩

10:35 WS6 導入教育の一般化 マニュアル化 60分

司会 花淵

小グループ学習法

小グループ学習法

大人数授業法

文章指導法

自己学習指導法

11:35 司会 花淵 発表 50分

12:25 昼食

13:15 WS7 教員の意識変化を促す方法を知る 50分

導入教育の意義や方法を知る。

導入教育に参加する。

学生の学力に関心をもつ。

個々の学生の学力を識別する。

学生の学力向上に積極的にかかわる。

学生の学力向上のために積極的に授業の工夫をする。

これらのための方法、教員の意識改革の方法

司会 及川

14:05 司会 及川 発表 40分

14:45 ポストアンケート

ポストアンケート 15分
タスクフォース感想 2名 (のこりは バスで)
ディレクター挨拶 3分

撤収

15:00 終了
バスのなかで 参加者感想 40分
16:10 当別校
16:40 あいの里校

つづいて 報告書 作成 10月 には資料をそろえる

阿部 全体の指揮
タスクフォース担当グループ

阿部	全体						
	WS1	WS2	WS3	WS4	WS5	WS6	WS7
東城	A	B	C	D	E	A	B
花岡	B	C	D	E	A	B	C
及川	C	D	E	A	B	C	D
国永	D	E	A	B	C	D	E
花淵	E	A	B	C	D	E	A

タイムマネージャー 長田 花淵

報告書 次を tobioka@hoku-iryo-u.ac.jp へ10月 11日 (火) までに (Windows: Ward)
各グループのプロダクト OHP、図なども適宜にとりいれて

WS1・WS2・WS3・WS4・WS5・WS6・WS7

感想400字程度 グループ代表

アンケート 集計 : (テスト・事前アンケートは会場集計)

タスクフォース感想: タスクフォース全員

阿部: 全体をとりまとめ報告書の形にする

備品 参加者名札 (学部 氏名 肩書きなし)
 ファイル (A4, 2穴) 各参加者に配布するプリントを順にとじる 持ち帰り
 クリップボード (A4 紙 縦:うえにクリップ) 参加者 メモ用 (後に回収一去年用)
 OHP用紙 手書き用 300枚ほど
 OHPカラーマーカーセット (細くなく)
 プリント ○○ページほど WSのつどわたすように整理
 レポート用紙 記録用 各グループに1冊

タイマー ブザーつき2個

持ち込み

OHP (心理科学部 言語のもの)
 液晶プロジェクター (ミニレク用) 阿部 ノートパソコン:阿部

ほろよい懇談会 用 紙皿、紙コップ、ゴミ袋

研修室部屋 設定

1) 全体発表用

長机 前に3 1:OHP、液晶プロジェクターのせ台
 2:前両側 タスクフォース資料台

参加者 机なし 椅子 人数分

後ろに机 荷物おき

スクリーン確認

マイク スピーカー (ポータブルセットをもちこみ 懇談会用)

2) 多目的ホール

グループ作業用 机の 島を 4グループ
 かこんで、人数分+1の椅子

食事

内容をかえてよい

23日 昼食 予約:和 幕の内 12:30
 夕食 予約:和定食 (ご飯もすぐたべられるように) 18:30
 懇談会 予約:ビール、ウーロン茶など 注文 20:30 (大広間)
 その他の酒は 持ち込み
 つまみも持ちこみ

24日 朝食 予約:和定食 7:30
 昼食 予約:カツ丼 12:30

バス手配 45席 以上 ガイドはとくに必要なし

マイク 必要 延長コードも

23日 あいの里キャンパス 8:20 出発:8:40

24日 ないえ温泉

14:50 出発 14:00から15:10

バス座席表

氏のみ

ワークショップのプロダクト

FD合宿研修グループ名簿

グループ名は各グループで考えたニックネーム

※氏名：アイウエオ順／敬称略

班区分	氏名	所属(学部・学科等)	専門領域(講座・専門分野・担当科目等)
A (8名) アビちゃん	●東 城 庸 介	歯学部	口腔生物学系(薬理学)
	倉 橋 昌 司	看護福祉学部 看護学科	生命基礎科学
	村 井 毅	薬学部	生命物理学(薬品分析化学)
	河 合 祐 子	心理科学部 臨床心理学科	臨床心理学・カウンセリング
	大 西 隆	歯学部	生体機能・病態学系(歯科放射線学)
	鎌 田 禎 子	看護福祉学部	人間基礎科学
	町 田 拓 自	薬学部	薬理学(薬理学)
	木 村 未 可	心理科学部 言語聴覚療法学科	言語聴覚学
B (8名) はまなす	●花 岡 真佐子	看護福祉学部 看護学科	実践基礎看護学
	三 浦 美 英	歯学部	生体機能・病態学系(歯科麻酔科学)
	酒 井 昇	心理科学部 言語聴覚療法学科	鼓膜形成術・気道形態学
	伊 藤 道 子	看護福祉学部 看護学科	母子看護学
	富 家 直 明	心理科学部 臨床心理学科	臨床心理学・行動医学
	山 田 康 司	薬学部	創薬化学(医薬化学)
	林 一 夫	歯学部	口腔構造・機能発育学系(矯正歯科学)
	居 弥 口 大 介	薬学部	生命物理学(薬品物理化学)
C (7名) ハイパーグループC	●及 川 恒 之	心理学部 言語聴覚療法学科	分子細胞生物学・再生医学
	中 山 英 二	歯学部	生体機能・病態学系(歯科放射線学)
	久 保 勘 二	歯学部	教養教育学系(人間基礎科学)
	堀 内 ゆかり	心理科学部 臨床心理学科	
	丹 野 和 子	看護福祉学部 臨床福祉学科	医療福祉臨床学
	大 澤 宣 明	薬学部	分子生命科学(免疫微生物学)
	根 津 顕 弘	歯学部	口腔生物学系(薬理学)
D (7名) ひぐらし	●国 永 史 朗	大学教育開発センター	人間基礎科学
	富 樫 廣 子	薬学部	薬理学(病態生理学)
	二 瓶 裕 之	薬学部	人間基礎科学
	漆 原 宏 次	心理科学部 臨床心理学科	学習心理学・実験心理学
	磯 貝 恵美子	歯学部	口腔構造・機能発育学系(保健衛生学)
	川 崎 美 香	心理科学部 言語聴覚療法学科	言語聴覚障害学
	内ヶ島 伸 也	看護福祉学部 看護学科	地域保健看護学
E (7名) E天気	●花 浏 馨 也	大学教育開発センター	人間基礎科学
	田 隈 泰 信	歯学部	口腔生物学系(生化学)
	齋 藤 いずみ	看護福祉学部 看護学科	母子看護学
	榊 原 健 一	心理科学部 臨床心理学科	
	長 田 真 美	歯科衛生士専門学校	
	松 本 大 輔	歯学部	口腔構造・機能発育学系(小児歯科学)
	明 野 伸 次	看護福祉学部 看護学科	実践基礎看護学
計			37名

A班(グループ名:アビちゃん)プロダクト

WS1:「学生を知る:入学生の多様性、学力を解析する」

学生の気質および問題点

【学習態度】

- ・ 自宅での学習習慣
- ・ 計画性のある学習
- ・ 受け身
- ・ 他者依存

【能力・スキル】

- ・ ベーシックな専門用語
- ・ 伝達能力
- ・ 文章力
- ・ 漢字の読み書き
- ・ ノートの取り方

【学習意欲】

- ・ 動機の有無
- ・ 積極性に欠ける
- ・ 私語をする
- ・ 集中力が無い
- ・ 専門知識への欲求度

【入試制度】

- ・ 入試区分
- ・ 不本意入学
- ・ 高校での科目履修状況
- ・ 二極化

【その他】

- ・ 生活習慣
- ・ 現役/浪人

学生の気質および問題点の関連性

学習態度—能力・スキル—学習意欲—入試制度

その他

- WS2:「導入教育の目標設計」
 WS3:「導入教育の方法設計」
 WS4:「導入教育の評価 設計」

授業題目名:仕事のプロに学ぶ

【概要】

専門的職業人を目指すために共通して必要な心構えを身につける。

【学習目標】

一般目標

専門的職業人となるために、その見通しを持つ。

行動目標

- ・どんな専門職があるのか分類する。
- ・職種の内容を解釈する。
- ・情報を収集して計画を立案する。
- ・話す力、聞く力、まとめる力を身につける。
- ・グループ発表のためのスキルを身につける。
- ・自分の将来にどう役立つのかを予測する。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題
1	全体オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。
2	小グループプランニングⅠ	資料収集法、調査法について学ぶ。
3	小グループプランニングⅡ	面接法について学ぶ。
4	小グループプランニングⅢ	インタビュー計画書を作成して提出する。 [形成評価] ①
5	ゲストスピーカー講演	医療・非医療関係者による講演
6	インタビュー練習	インタビュー形式、質問内容等を検討した後、練習する。
7	先輩インタビュー	予行練習として学生の先輩へのインタビューを行なう。
8	発表・反省会	先輩へのインタビュー結果を発表・反省会を行なう。 [形成評価] ②
9	計画再検討	予行練習の結果を基に本インタビューの計画を再検討する。
10	本インタビューⅠ	本インタビューを実施する。
11	本インタビューⅡ	本インタビューを実施する。
12	まとめ・発表準備Ⅰ	本インタビューの結果をまとめて発表の準備を行なう。
13	まとめ・発表準備Ⅱ	本インタビューの結果をまとめて発表の準備を行なう。
14	発表会Ⅰ	グループ別にインタビュー結果を発表する。
15	発表会Ⅱおよび総括	グループ別にインタビュー結果を発表して総括する。 [総括評価] ③

【学習形式】

- ・必修科目
- ・学部単位
- ・10人×8グループ

【評価方法】

出席（学習態度を含む）：20%

形成評価①：20%

形成評価②：20%

レポート課題（発表評価を含む）：40%

WS5:「導入教育の授業設計 自由な発想」

授業題目名:キャンパスライフ通論

【学習形式】

- ・選択必修形式
- ・小グループ学習

【学習内容】

1. 自己紹介
 - ・自己表現力、聞く力
 - ・コミュニケーション、プレゼン力
2. 小グループ討論
 - ・まとめる力
 - ・ディベート力
3. テーマの選択（例：ヨサコイ）
 - ・想像力
 - ・人間関係力
 - ・身体力

WS6:「導入教育の一般化 マニュアル化」

小グループ学習法の一般化

【導入教育の目的】

学生の多様性に対応し、高校から大学への円滑な移行をはかり、学習および人格形成に向けて大学での学問的、社会的経験を成功に導く。

【小グループ学習法の利点】

- ・体験できる。
- ・教員の目が届く。
- ・双方向的な講義ができる。
- ・学生相互の深いコミュニケーションがはかれる。
- ・多様な学生に対応できる。
- ・個別に応じた細かな指導が可能である。

【小グループ学習法の留意点】

- ・所属集団以外の意見を聞けるようにする。
- ・全体でシェアリングする。
- ・資源（教室、教員配置数不足等）の制限がある。
- ・多くのテーマが必要になる。
- ・グループダイナミックスを理解する。
- ・教員の能力に依存するところが多い。
- ・教員は1コマあるいは1セッションの目標、成果、時間配分などのタスクを理解していなければならない。

小グループ学習法のマニュアル化

【グループ分けの基準】

- ・1グループ6～7名程度。
- ・男女混成が望ましい。
- ・能力、成績は考慮しない。
- ・テーマ希望を考慮する。

【グループ教育の方法】

- ・役割分担（リーダー、記録者、発表者、タイムキーパー）を明確に決める。
- ・グループ内のルールを事前に決めておく。
- ・自己評価（学生自身）をさせる。

【グループ教育の評価法】

- ・チェックリスト（学習態度、習慣の項目を含む）を使用する。
- ・レポート評価の基準（枚数、期限等）を明確にする。

WS7:「教員の意識変化を促す方法を知る」

導入教育の意義や方法を知らせる

- ・FDを利用させる。
- ・FD→大学教育センター→シラバス作り→教員へ配布→研修
- ・3、4年生で少人数形式の授業を取り入れる（プレテスト）
- ・シラバスに『導入教育』を強調して明示し、説明文を載せる。
- ・内外にアピールして共通認識を持たせる。

導入教育に参加させる

- ・専門科目を受ける高学年生の授業態度との差を知らせる。
- ・専門科目の教員にも問題意識を持たせる。
- ・教員同士（学部別、学年別）の意識の共通化を図る。
- ・少人数グループの授業を公開（参観）する。
- ・『私語』の解決法を考え、教員自身の最も身近な問題として認識させる。

B班（グループ名：はまなす）プロダクト

WS1「学生を知る：入学生の多様性，学力を解析する

新入学生の多様性について KJ 法を利用しながら議論した結果，大別すると以下のように 5つの項目に関する多様性があると結論した．また，各項目に関連する問題点等についても記述する．

1. 入学動機
 - ・ 将来の目標が明確でない学生
 - ・ 動機が明確である学生もいる
 - ・ 皆が進学するから受験し入学した学生
2. 人間関係
 - ・ 自分のことを話すのは大好きな学生
 - ・ 対人関係づくりができない
3. 学力
 - ・ 受身で問題が何なのかがわかっていない
 - ・ 基礎がわかっていない
 - ・ マークシートでの解答に慣れているため，考えをまとめられない
 - ・ 感じで文章を書くのは得意ではない
 - ・ 学生によって，授業内容を理解する能力が違う
4. 集中力
 - ・ 80分間座っているのはつらい
 - ・ 持続的に話を聞くことができない
5. 授業態度
 - ・ I 講目の授業に遅刻する学生が多い
 - ・ 私語が多い

WS2-4「導入教育の目標・方法・評価設計」

個別テーマ（大人数クラス／100名）

授業科目名：メンタルヘルス概論

【概要】

若年層の心の健康が社会的な問題になっている。大学生が健康な学業生活を送るために必要なメンタルヘルスの基礎知識・技能・態度を身につける。

【学習目標】

一般目標

- (1) 心の健康とは何かを理解する
- (2) ストレスのメカニズムを理解する
- (3) ストレス対処法を身につける
- (4) 青年期の精神病理を理解する

行動目標

- (1) について
 - ① 学生生活上のさまざまなストレスを列記できる
 - ② 自分自身の特徴を分析する
- (2) について
 - ① ストレス科学に関する文献を調べる
 - ② 上記(1)-①と調べた文献を照合したことを表現する

【学習内容】

回	テーマ	授業内容及び学習課題	担当	評価
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。自己分析と体験する。	1名	
2	ストレスとは何か	代表的なストレス理論を学ぶ	1名	
3	ストレスと心身問題1	代表的な心身症を学ぶ（消化器系）	1名	
4	ストレスと心身問題2	代表的な心身症を学ぶ（循環器系）	1名	
5	学生生活とストレス1	学部別グループディスカッション 課題提示：所属学科別に上級学生へインタビュー ※教員1名につき学生25人名担当。サブグループ5人編成（他に	4名	

		TA4 人が必要)		
6	学生生活とストレス 2	学部別グループディスカッション まとめ・資料作成	4名	
7	学生生活とストレス 3	学部別グループディスカッション 発表・質疑	4名	
8	ストレス科学の理解	指定文献を読む, まとめる. レポート課題の提示	1名	
9	ストレス対処の理論	ストレス対処法の理論と実際を学 ぶ	1名	レポート提出 (中間評価)
10	ストレス対処の実践 1	円滑なコミュニケーションスキルの 練習	4名	
11	ストレス対処の実践 2	リラクゼーション技法の練習	4名	
12	精神医学の基礎	精神医学を概観する	1名	
13	大学生のうつとバーン アウト	うつやバーンアウトの予防や対処 技法について学ぶ	1名	
14	青年期の不安障害	不安障害の実際について学ぶ	1名	
15	精神医学的ケアとスク ールカウンセリング	スクールカウンセラーによる講義 本学のスクールカウンセリング制 度の紹介 (学校保健)	2名	

【評価方法】

出席状況	20%
中間評価 (レポート)	30%・・・知識と体験的理解の一致
定期試験	50%・・・知識, 体験的理解 各種技法の習得, 見通しの獲得, 等

WS5「導入教育の授業設計 自由な発想」

授業科目名： 北海道で学ぶ

【概要】

北海道で生活し学ぶことの意義を再確認するために、北海道の文化・産業・医療・歴史・気候等の背景について学ぶ。また、地域に貢献し地域から期待される医療人としての自覚を形成する。

【学習目標】

一般目標

- (1) 北海道での生活を楽しくスタートするために、北海道の食・自然・気候等を知る
- (2) 地域に貢献する医療人としての自覚を持つために北海道の医療の課題を知る

行動目標

- (1) 北海道の誇れる食・自然・産業について列挙できる
- (2) 北海道の生活の楽しみ方を創造する
- (3) 期待される医療人としてのイメージを表現できる

WS6「導入教育の一般化 マニュアル化」

小グループ学習法

小グループ学習法を実施するために必要な項目として、以下のように 9 つの項目が挙げられる。これらの項目に関連する事項について記述する。

1. コーディネーターのルール
 - ・ 各グループのコーディネーターの教育
 - ・ 教員側のルールと学生側のルールを明確化する
2. グループの構成
 - ・ グループ人数等，グルーピングのルール化
 - ・ グループの再構成
3. 小グループ学習のルール
 - ・ 作業進行のルール化（発現時間の制限，必ず発現する，他者の意見を聞く，等）
 - ・ トラブルに対処するルール作り
4. グループの理解
 - ・ 自己紹介，他己紹介
 - ・ 集団凝集性を高める工夫（エンカウンターグループの導入）
5. 役割分担
 - ・ 不参加にさせない
 - ・ 司会，書記を決める
6. 目標の明確化
 - ・ ゴールを明確にする
 - ・ 目標に沿った進行をさせる
7. 学習方法
 - ・ ディスカッションに重点を置く
 - ・ KJ 法の導入
 - ・ プレゼンテーション
8. 個性の尊重
 - ・ 個を活かす
 - ・ 自主性を持たせる
 - ・ 意見が異なることを恐れない（少数意見を尊重）
9. 評価方法
 - ・ プロセスの評価
 - ・ グループプロダクトの評価
 - ・ 個人レポートの評価

WS7「教員の意識変化を促す方法を知る」

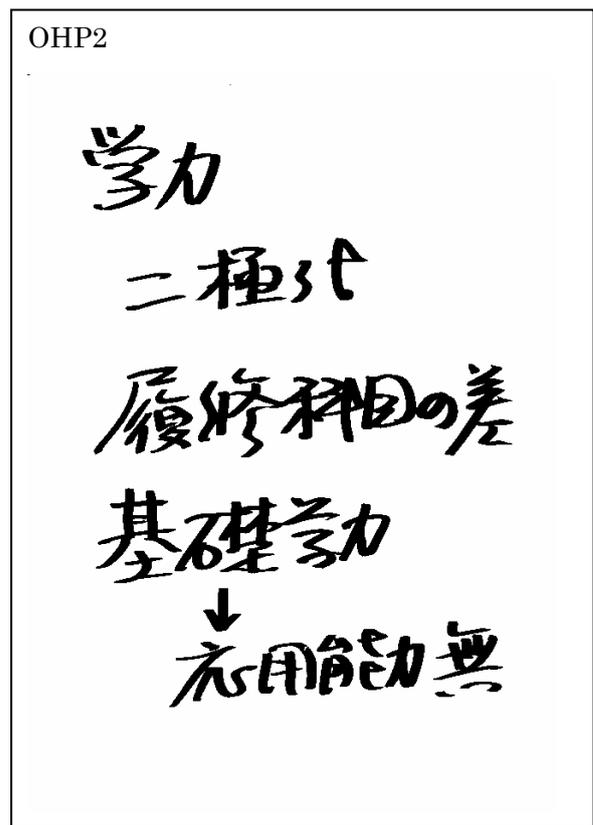
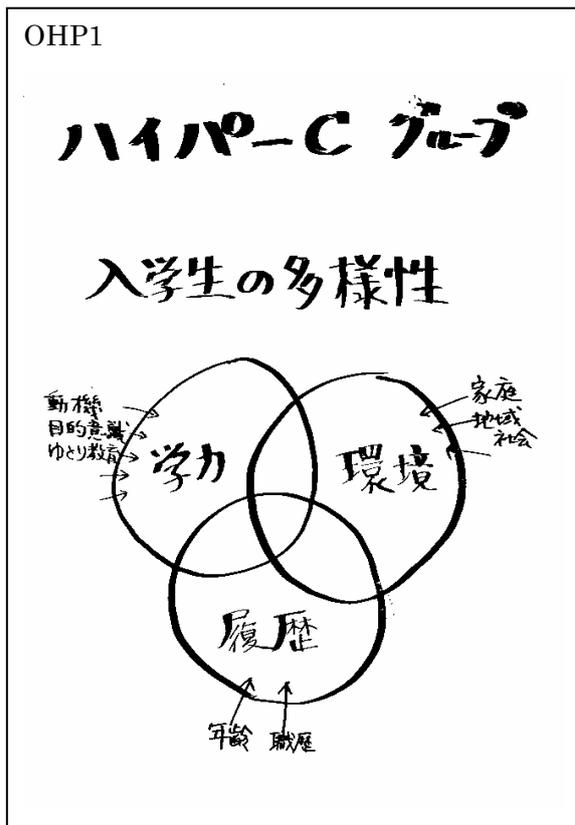
教員の意識変化を促す方法として、以下の 3 つの項目について議論した。これらの項目に関連する事項を記述する。

1. 学生の学力に関心をもつ
 - ・ 学生の現状分析（入試データ等）
 - ・ 教員の意識調査
 - ・ 教育リソースの分析
 - ・ ディスカッションで問題の共有
2. 導入教育の意義や方法を知る／導入教育に参加する
 - ・ 講演
 - ・ FD 研修参加に対する教員評価
 - ・ FD の全員参加の義務化
3. 学生の学力向上に積極的にかかわる（授業の工夫）
 - ・ 補習授業を行う
 - ・ 習熟度別編成にする
 - ・ 細かな評価と丁寧な対応
 - ・ チップス集を作成する
 - ・ 授業公開

平成 19 年度 FD 合宿 ハイパーグループ C 報告書

WS1 「学生を知る：入学生の多様性，学力を解析する」（報告者：久保勘二）

本大学に入学した学生を知るために、「入学生の多様性」と「学力を解析する」の2つに分けて、KJ法を用いて論議した。KJ法で収集した意見（カード）は文末にまとめた。入学生の多様性については、学力の多様性（動機、目的意識、ゆとり教育など）、環境（家庭、地域、社会など）、履歴（年齢、職歴など）の3つに分類できた。「学力を解析する」については、最近の入学生の学力は二極化しており、履修科目にも差があり、基礎学力の低下や応用力がないという意見にまとまった。また、学力を解析するための方法として、入試（受験科目）、受験時の成績、高等学校の習得科目の把握や入学時試験（化学、生物、物理、英語、数学、国語など）をおこなうことが好ましいと考えられる。実際、当大学の歯学部・薬学部では、学力を解析するために入学時試験（化学、生物、物理）がおこなわれている。



KJ法で収集した意見（カード）

「入学生の多様性」

学力の多様性

○最初から講義を聞く気がない。単にいただけ

- ここにしか合格しなかったからきている
- 目的意識がはっきりしている学生としていない学生
- 入学時の動機（目的意識）が不明瞭な学生から高すぎる学生まで
- 高校未履修教科
- 講義開始時間になってもお菓子を食べている
- 机の上にかばんがのっている
- プライベートな主張をする学生がいる
- 言葉使い
- ゆとり教育

履歴の多様性

- 幅広い年齢層
- 学生の履歴

環境の多様性

- 育った地域による社会的スキル
- 出身地の違いによる行動性
- 服装の多様性
- 経済的環境
- 少子化による家庭環境による社交性など
- 友達をつくることができない
- 生活態度が安定している学生と不規則な学生

「学力を解析する」については以下の意見

学力の二極化

- 極めて学力の低い学生が数名いる
- 優秀な学生がいる一方で非常にできの悪い学生がいる。
- 基本的な学科目の習得されている学生がいる一方でかたよっている学生がいる。
- 英語が苦手
- 統計の知識を身につけるための数学力が足りない
- 入試（受験科目）の把握
- 受験時の成績の把握
- 高等学校の習得科目の把握
- 入学時試験（化学，生物，物理，英語，数学，国語など）
- 学力を知るためのミニテストをおこなう（評価のみ）
- 学生実習などの小規模のグループ作業で行う（個人のスキル）をみる。

WS2 「導入教育の目標設計」(報告者：根津顕弘)

対象講義；医療系統合テーマ (少人数クラス)

授業題目名；「医療人学」

講義担当；中山英二、久保勘二、丹野和子、
根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり

[講義概要]

少人数のディスカッションおよびロールプレイによって学生の持つ医療人のイメージを具体化する。さらに学生の協調性やコミュニケーションスキルを向上し、今後の学習へのモチベーションをより高める。

[学習目標]

一般目標：

医療・福祉に関わる学問を学ぶために、医療人とは何かについて考える。

行動目標：

- 自分の持つ医療人のイメージを列挙できる。
- 好ましい医療人とは何かについて討議できる。
- どんな医療人になりたいかについて他者に説明できる。

#学生の目標を明確にさせる。

提出レポート例；#一枚のシートに記載してもらう。

「医療人学レポート」

学部

学科

学生番号

氏名

グループ名_

第1回講義：(講義前調査)

将来どのような医療人になりたいか？

(この講義を行う前に、学生が考えていた医療人に対するイメージあるいは目標とする医療人のイ

メージを率直に書いてもらう。)

教員印

第 回 ロールプレイを行った後の反省点

○良かった所

○悪かった所

(ロールプレイの効果を自分で判断させ、コミュニケーションスキルに関する点で、自分の長所あるいは短所を理解してもらう。)

教員印

第15回:(講義後調査)

将来どのような医療人になりたいか？

(これまでの講義および討論後の、医療人に対するイメージを書いてもらい、それが最初にしたものと比べ、どう変化したのかを十分に考えさせる。)

教員印

グループワーク評価票例

#グループワーク時の学生の対応を評価し、調査票に記載する。

学部

学科

学生番号

氏名

グループ名_

第__回講義

評価項目	A	B	C
1)積極的に発言しているか？			

2) 適切な質疑応答が出来ているか？			
3) 自分の役割を果たしているか？			
4) 簡潔に意見をまとめているか？			
5) 全体としての評価 (概略評価)			

その他;

WS4 「導入教育の評価 設計」(報告者：堀内ゆかり)

科目名

医療人学

講義担当者名：中山英二、久保勘二、丹野和子、
根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
(1) 学年 ○前期 後期
選択 ○必修 (2) 単位

【学習目標】

本科目では、医療・福祉に関わる学問を学ぶために、医療人とは何かについて考えていく。講義の中で、医療人のイメージを具体化することを目標とし、主としてグループワークによる討論形式で進めていく。

【講義内容】

回	単元（テーマ）	講義内容および学習課題	担当者
1 2	オリエンテーション	授業の進め方と全体の流れを把握する。 ・ グループワークについて理解する。 ・ 自分はどんな医療人になりたいか列挙する。	中山英二、久保勘二、丹野和子、根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
3	医療系専門職の理解	さまざまな医療系専門職について知る。 ・ 医療系専門職の役割を整理し、理解する。 ・ 実地見学で学びたいことについてポイントをまとめる。	中山英二、久保勘二、丹野和子、根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
4 5	実地見学	さまざまな医療専門職が勤務する職場を見学する。	中山英二、久保勘二、丹野和子、根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
6 7	討議（1） テーマ「理想的な医療人とは？」	理想的な医療人について討議する。	中山英二、久保勘二、丹野和子、根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
8 9	討議（2） テーマ「医療の問題」	医療の問題について討議する。	中山英二、久保勘二、丹野和子、根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
10 11	討議（3）	自分たちが考える医療のテーマについて討議する。	中山英二、久保勘二、丹野和子、根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
12	ロールプレイ	自分の意見を相手に伝えたり、他者	中山英二、久保勘二、

13		の意見を聞く。	丹野和子、 根津顕弘、大澤宣明、 堀内ゆかり
14	総括	全体発表会	中山英二、久保勘二、 丹野和子、 根津顕弘、大澤宣明、 堀内ゆかり
15		・自分はどんな医療人になりたいか まとめる。	

教科書名（出版社名）：特になし

参考書名（出版社名）：講義の中で紹介する

評価方法：出席点による評価 30%、提出レポートによる評価 30%、単元ごとの学習評価 40%

WS5「導入教育の一般化 マニュアル化」（報告者：中山英二）

自己学習指導法

科目名

Hyper オリ-How to Study

大学でいかに生きのこるか

講義担当者名：中山英二、久保勘二、丹野和子、
根津顕弘、大澤宣明、堀内ゆかり
(1) 学年 ○前期 後期
選択 ○必修 (2) 単位

【概要＝一般目標】

本科目では、大学学習からドロップアウトせず充実した生活をおくるために、大学で自発的かつ効率的に学習するのに役立つ実践的スキルを身につけることを目標とする。
講義の中では、大学で自己学習するために身につけるべき基本的情報だけでなく、従来のオリエンテーションでは不十分であった効率的に自己学習を実践するための具体的な方策を実習、演習、実体験を通して学んでいく。

【講義内容の概要】

例：

1. 時間の使い方教習（4コマ程度）

一週間の行動を時間ごとに記録し、自分の時間の使い方の実態を分析する。その後、効率

的でない時間の使い方を抽出し、具体的な改善策をたてる。そして最終的には、自分の行動実態に即した行動計画を立案する。

2. 図書館の利用法 (3 コマ程度)

図書館の場所や機能、図書の借り出し、返却法のみならず、図書館内の閲覧席の取り方を学ぶ。これは自習するのに最も適した閲覧席の環境は個人にとって異なるのでまずどのような環境が最も自分が集中して学習できる環境かを分析する。その上で、その環境に適した閲覧席の確保方法を獲得する。また、何か具体的な話題を各自で設定して、その話題に関する具体的な図書や文献を検索する実習を行う。そのために図書や文献検索ソフトも実際に使用し、図書館の蔵書検索を行い、その図書や文献を入手する。学内にない場合は学外取り寄せも実際に行って、最終的には全員が関心図書や関心文献を入手する。

3. 情報教育の基礎

電子メールのマナー、送り方、セキュリティー管理の実際、PubMed, Google などでの情報検索などを実践する。

4. 健康管理術

自分の食事、起床就寝時間、健康状態を分析し、健康を維持する上での問題点を抽出し、健康に学生生活を送るための具体的な改善策を立案する。

5. その他の演習など。

教科書名 (出版社名) : 特になし

参考書名 (出版社名) : 講義の中で紹介する

評価方法 : 出席点による評価 30%、講義時間内の課題達成実績 30%、提出レポートによる評価 40%

WS6: 導入教育の一般化、マニュアル化 (報告者 : 大澤宣明)

テーマ : 自己学習指導法

目標 : 自己学習の習慣化を目指す

主旨 : 学生生活において、空いた時間の有効活用のための授業外授業を習慣化できる

そのために、

- ・ 自己学習の体験
- ・ 自己学習効果のビジュアル化・フィードバック

具体例としては、

中学時代に習った基本的な実験操作法などをデモンストレーションしてもらう。その際、事前に内容を告知しておき、復習させておくグループと、復習させないグループでデモンスト

* 強制参加とするか？



参加する必要性を確認することが大切

誰かが行なうのだろう… というのではなく、自分が行なうのだ！という意識を持つように。

大きな共通目標を決める。

国家試験合格 100%

共通の目標に向かって前進していくこと。

入学時の成績は低かったが、医療大で学ぶことにより [知識向上率が上昇した]。その結果、国家試験に合格することができたと言う実績を示していくことが大切である。

国試合格率は、入学先を決定するとき、受験生とその親にとっては大きな要素になっている。

予備校のデータからも入学時と卒業時の学力・知識量の向上は明確に示されるようになることが考えられる。 → 予備校としてもデータを示しながら本学受験を勧めるようになるであろう。

心理学部、臨床福祉学科介護福祉コースなど直接「国家試験合格！」とは結びついていけない学科もあることを踏まえて具体的な方法を考えていく必要があると思う。

感想（報告者：グループ代表・中山英二）

導入教育とはなにか、導入教育の必要性を考えることになり有意義でした。また、各自が考えた具体的な科目も必要で重要なものばかりで、それらが本当に開講した場合はすばらしいと思いました。しかし実際に行うには、1) 現在行われている科目を取りやめて新たな抗議時間を作り出す必要がある、2) 担当教員を確保する必要がある、の二点が最大の解決されるべき課題と考えます。また全学的に行うのであればさらにこれらの課題の解決は困難だと感じました。タスクフォース側から、計画だけでなくいかに実行するかが重要であるとの指摘がありました。そのとおりですが、しかし実際、このFDで目指した到達目標としては、実際に導入教育を新たに行える計画を策定することではなく、導入教育の必要性を共有しようというものであると理解されるFD内容でした。それゆえ、その指摘は、私たち参加者一人一人に対してのみにではなく、それはそのまま今回のFDの企画者に同時に発せられた課題であるとも考えられました。

今回のFDの到達目標が導入教育の必要性を共有しようというものであるという点においては大きな成果を挙げたと思います。

FDは無駄な企画ではなく、本当に必要なものであると常々考えております。しかしそうであるがゆえに、その実施方法は、多くの教員が過剰な負担や、参加を渋る要因をできるだけ排除したものに改善されるべきであると思います。私はOSCE、研修医師指導歯科医講習会、その他の同様のFDに今まで複数回参加し、その中でFDの実施方法が必ずしも妥当なものではなく、一部改善されるべき要因があると考えようになりました。その改善されるべき要因は二つあり、ひとつは泊まりがけの合宿であること、ふたつめは土曜日、日曜日に行われることの二点です。私個人としては大学の公式行事を土曜日、日曜日に行う必要があることに反対する意図はありません。たとえばオープンキャンパスなどは参加する高校生の立場を考えれば当然土曜日、日曜日になされるべきでしょう。しかし、FDにおいて土曜日、日曜日に開催されなければならない正当な理由を私は思いつきません。それは単に人が集まりやすいからとの理由と思われる。それ以外の平日では日常の業務があり、実施日程が組めないとの理由でしょうか。しかし、大学行事の中で、本当に重要な会議などが土曜日、日曜日に行われるのでしょうか。それは否です。どんなに多忙でも必ず平日に会議がおこなわれます。

このことを考えると結局FDがOPTIONとしてしかとらえられていないことの証のように私には感じられます。本当に重要であるならば、半年以上前に実施日を決め、参加者を決め、ぜひ平日に、日常の業務の一環としてFDを多くの教員に参加させるように変更して頂きたいと思います。平日に他学部の教員と一緒に2日間作業をすることで学部の垣根を越え理解し合えると思います。その意味で懇親が深まるという利点があるにしても泊まりがけの合宿の必要性もあまりないと私は考えます。そうすることで多くの教員に、参加必須の業務であるとの認識が浸透するものと期待しています。

真にFDが今まで以上に成果を生むためには、以上のことをそろそろ考慮してもいい時期にきているのではないのでしょうか。

Dグループ（「ひぐらし」）プロダクト

はじめに

21世紀の日本は少子高齢化によって、いわゆる大学全入時代となった。社会が豊かになり、国民の知的欲求の水準が高度化する中で、これまで以上に幅広い学生を受け入れ、そのニーズに答えるなど、大学をはじめとする高等教育機関は大きく変貌していくと考えられる。特に入学生の多様化と大衆化、学力低下などが深刻な問題として取り上げられてきた。打開策のひとつとして、導入教育がある。そこで、今回のFDでは「導入教育を設計する」をメインテーマに7つのワークショップで議論を重ねた。以下にその概要を記す。

メインテーマ：導入教育を設計する

WS1：「学生を知る：入学生の多様性、学力を解析する」

以下のような3点が、現在の学生の修学上の問題として挙げられた。

1. 基礎学力に関する問題

文章読解力が無い

長い文章を読んで内容を理解することが困難

一般常識がない

敬語、言葉遣いなど、TPOにあわせることができない

計算力がない

算数の力が未熟、化学、物理の基本法則が身につけていない

2. 集中力、根気・粘りが無い

講義中に私語が多い

黙って長時間座っていることができない

社会性の低さ(常識、マナー)

私語をして周囲に迷惑をかけても平気

講義に毎回遅れてくる、遅れてきて友達と喋っている

3. 学習を進める上での問題

レポート課題に関する問題

他人のレポートをうつす

提出するレポートの書式が整っていない

勉強の仕方が分からない

どのように予習・復習・テスト勉強をすればいいのかが分からない

上記1、2の問題の根本的な原因として、大学入学前に本を読まない、読む量が少ない、根気、粘りを身につけるような経験をしていないなどが考えられる。また、3の問題は、1、2の問題が主たる原因となり起こっていると考えられる。相互関係を図1に示した。

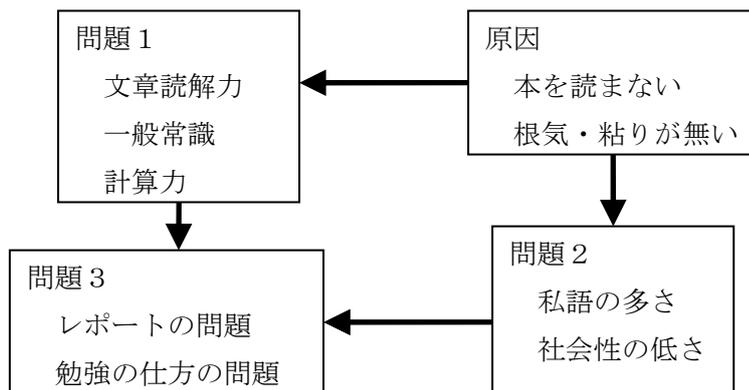


図 1. 学生の修学上の問題と相互関係

WS 2 : 「導入教育の目標設計」

授業科目名：新医療人概論

1 年生（全学部） 前期 選択必修 2 単位

【概 要】

この科目では、高度に専門化した医療に対応できる「新医療人」を目指して医療系総合大学で学ぶにあたって、医療職の全体像と自己の位置づけを理解し、さらに、各専門領域間の連携のあり方について学ぶ（図 1）。

【学習目標】

1. 自分の未来像を具体的にイメージするために、医療体制の中での自分の位置づけを知る
 - 1) 医療分野にかかわる他職種を列挙できる
 - 2) 他職種を簡単に説明できる
 - 3) 医療分野の中で自分の目指す職種の役割、責任を説明できる
2. チーム医療実現のために、他職種とのコミュニケーションを実践できる
 - 1) チーム医療実現のために、他職種とのコミュニケーションの必要性を理解できる
 - 2) チーム医療実現のために、必要なコミュニケーションスキルを身につける

WS 3 : 「導入教育の方法設計」

【学習内容】

第 2・3 回で医療の現状についての講義を受け、第 4 回では自分が目指す職種について調べ、第 5～8 回はそれを他学部生に向けて発表する。第 9・10 回は、学部を混ぜた

グループで医療チームの連携についてディスカッションし、第 11～14 回でそれを他グループに発表する（表 1，図 2）。

WS 4：「導入教育の評価設計」

【評価方法】

1. プレゼンテーション評価
 - 1) チェックシートを用いた学生の相互評価（25%）
 - 2) 教員評価（25%）
2. 意欲・態度を含む出席状況（25%）
3. レポート（25%）

表 1. 導入教育の設計プラン

回	テーマ	授業内容と課題
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握
2	医療現場の現状 I	導入教育のために医療現場で活躍する姿を紹介
3	医療現場の現状 II	医療における連携
4	自分の目指す職種 (PBL)薬/歯/看/心	職種についての内容を知る 情報収集→分析→発表
5	発表	他の学部の説明できる
6	発表	
7	発表	
8	発表	
9	連携と医療	医療チームの連携を考える
10	(PBL)MIX	
11	発表	
12	発表	
13	発表	
14	発表	
15	総合討論	

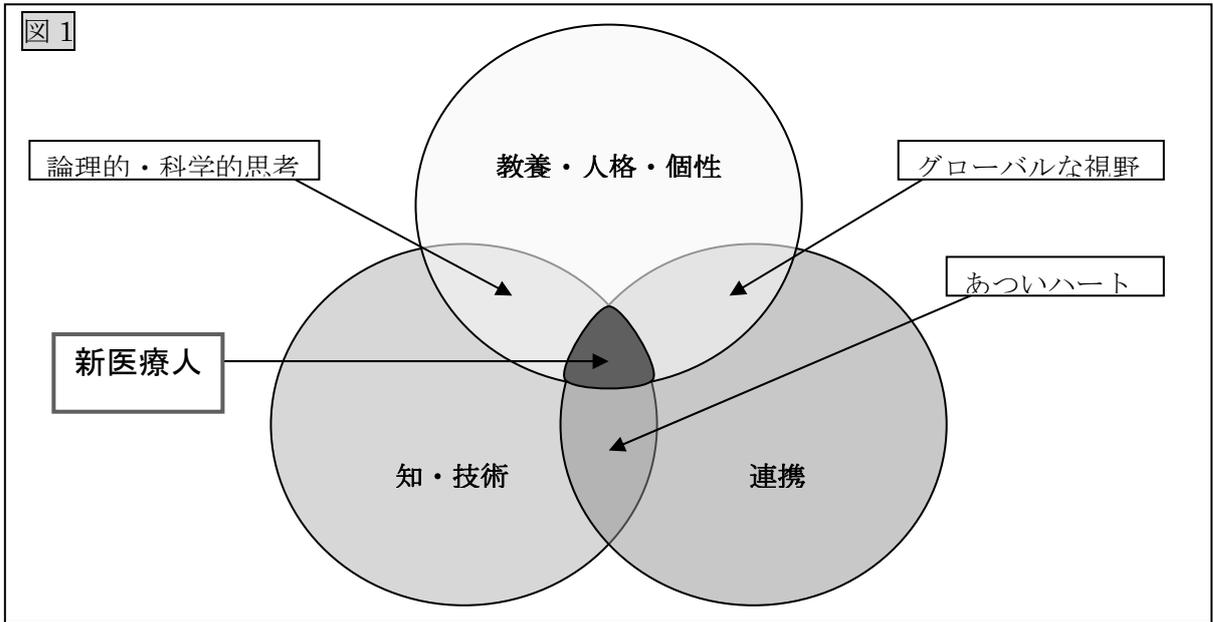


図 1. 医療職の全体像と自己の位置づけおよび各専門領域間の連携

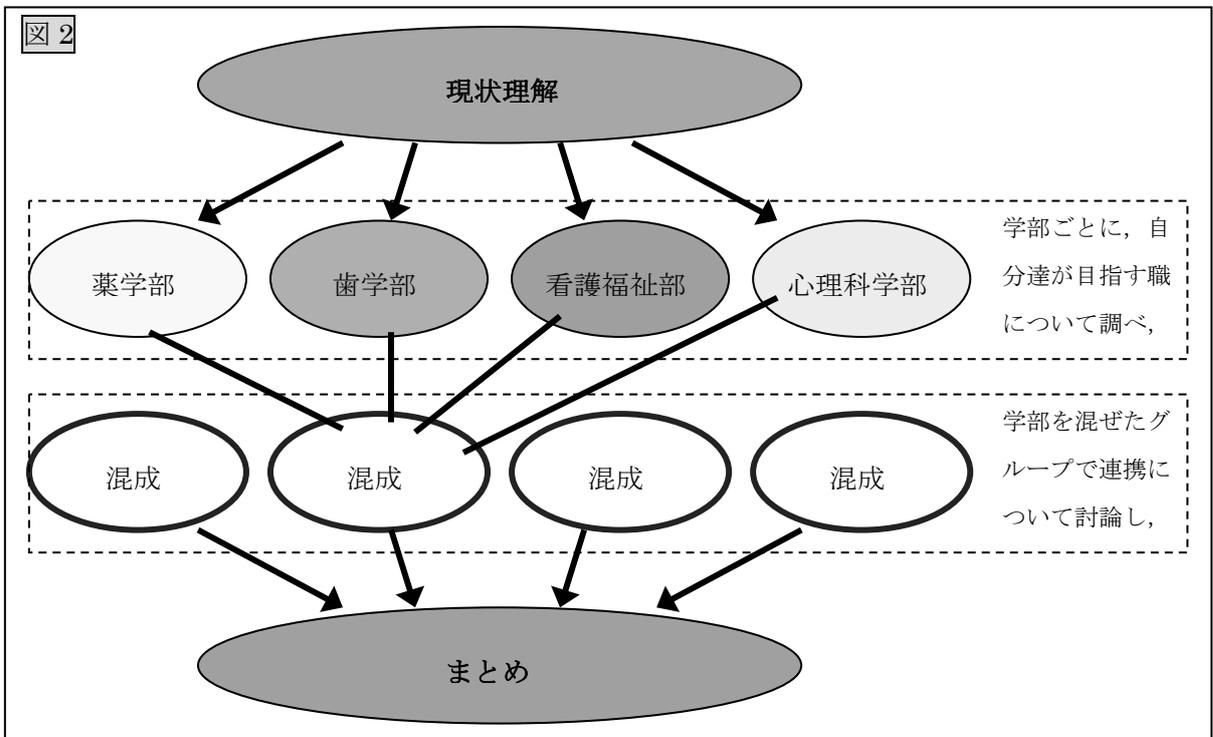


図 2. 導入方法の設計

WS5 導入講義の授業設計 自由な発想

【授業科目名】新医療人概論（II）みんなの健康

【概要】医療を学ぶ基本としての個に立ち返り、自分にとって「健康」とは何かを考え、他者との違いを認識することによって、「健康」観の多様性を学ぶ。

【学習目標】

一般目標

1. 「健康」自己の健康観を明確にするために、自分にとって「健康」とは何かを、日常生活の視点から考える。
2. 「健康」観の多様性を知るために、「健康」に対する他者との違いを理解する。
3. 「健康」の概念を明らかにするために、「健康」に関わる要素を知る。

行動目標

1. 自分にとって「健康」とは何かを、日常生活の視点から列挙することができる。
2. 「健康」に対する他者との違いを比較し、「健康」観の多様性を理解することができる。
3. 「健康」に関わる要素を列挙することができる。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容と課題
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握
2	ビデオ学習「健康」	健康の個人差・あり方を知る
3	健康を考える	健康を日常生活の視点で考える
4	生活チェックシート制作 (PBL・MIX)	自らを見つめなおすことによつて自分にとっての健康を考える ↓ グループ内のディスカッションによつて他の人の健康観(健康観の多様性)を理解する
5		
6	相互チェック討論	
7		
8	グループ傾向と健康キーワードの抽出 抽出キーワード→情報収集→分析→まとめ	
9		
10		
11		
12	発表 I	
13	発表 II	
14	発表 III	
15	総合討論	

【評価方法】出席（出欠、意欲・態度） → 40%； レポート → 60%

WS 6 「導入教育の一般化 マニュアル化」

テーマ「大人数指導法」

導入教育における「大人数指導法（対象人数設定 100 人）」についてマニュアル化するため、導入教育の意義を確認した上で目標と留意点、その対応を検討しマニュアル化のポイントをまとめた。

1. 導入教育の意義（一般論）

「大学入門科目群の位置づけ」大学での学習方法を身につける

学習の基盤は諸年次につくられる。早い時期にきちんとした学習の姿勢でできた学生は大学生生活全体を通じて勉強の達成度が高いことが知られている



問題発見・討論の仕方・レポート作成能力などの養成するゼミ・講義・PBL などを通して学びの技などを教える

2. 設計のポイント

- 1) 学生自身
- 2) 教員
- 3) コミュニケーション
- 4) 方法と環境
- 5) 課題
- 6) 評価
- 7) 内容充実度
- 8) 得られる成果

3. 導入教育における大人数授業法のマニュアル化

1) 目標

- (1) 大学の授業は「自ら取り組む」
 - (2) 素材サーチ（情報検索：学生から）する
 - (3) まず自分が「理解する」。そして相手に「理解してもらおう」。そのための「発表力」を身につける
- (1) ～ (3) を学習するためには「大人数のメリットを生かし、それに少人数のメリットを加え相乗効果をねらう」必要がある。

2) 大人数授業法の留意点と対応（図 1）

- (1) 大人数授業法のメリット

- ①「効率的」であり少ない教員数で実施できる。またそのためカリキュラムも組みやすくコストも少ない。
- ②他学部との交流など、出会いが拡大され、その結果コミュニケーションが多様化する。
- ③情報の共有・共感ができる

(2) 大人数授業法の留意点

- ①個々の学生に目が届かない
- ②学生の参加意識が低い
- ③一方向性である

(3) 大人数授業法の対応

- ①(1)-①は、あくまで大学および教員側のメリットに過ぎず、(1)-②③のメリットを学生が十分えられるよう考慮が必要である。
- ②(2)①～③は学生の目的意識・意欲そして学力に大きく影響すると考えられる。
- ③これらを考えたうえで、「講義の中で小グループでの作業を入れ、その成果を全体にフィードバックする」授業を行う。

3) マニュアル化のポイント（まとめ：図 2）

- (1) 全体（100人）に対するオリエンテーションを行う
- (2) 全体に対する講義を実施
- (3) 問題の提起・抽出を小グループ（10人程度）で実施し、それを発展させ検討・討論しまとめる。
- (4) 必ず全体にフィードバックし相互理解とする。

メリット		留意点
教員 ・ 大学	<ul style="list-style-type: none"> ・効率的 ・教員数が少ない ・カリキュラム編成が容易 ・コストが低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々に目が行き届かない ・学生の参加意識が低い ・一方向性 <p style="text-align: center;">↓</p> 目的意識・意欲・学力に影響
学生	<ul style="list-style-type: none"> ・出会いがある ・コミュニケーションの多様性 ・情報の共有・共感 	

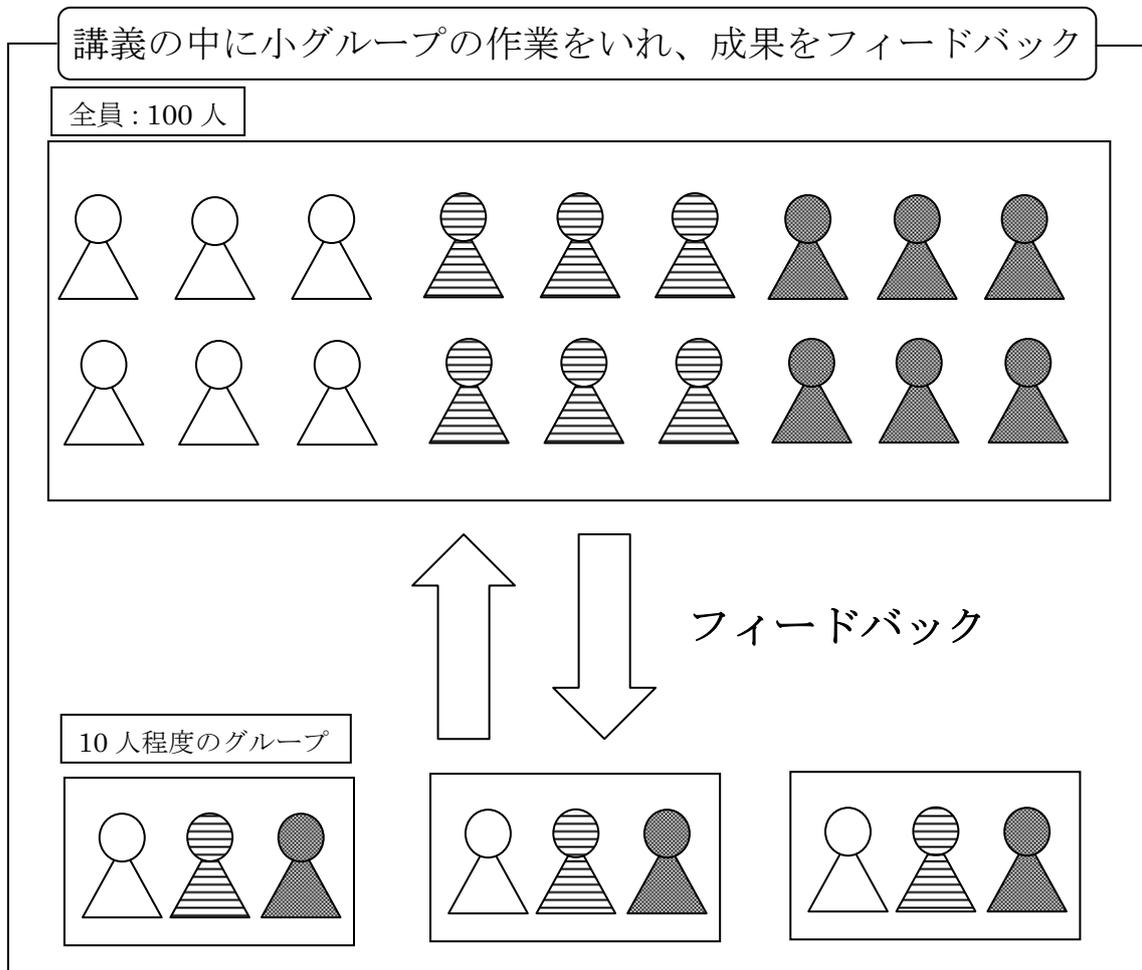
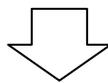


図1 大人数授業法の留意点と対応

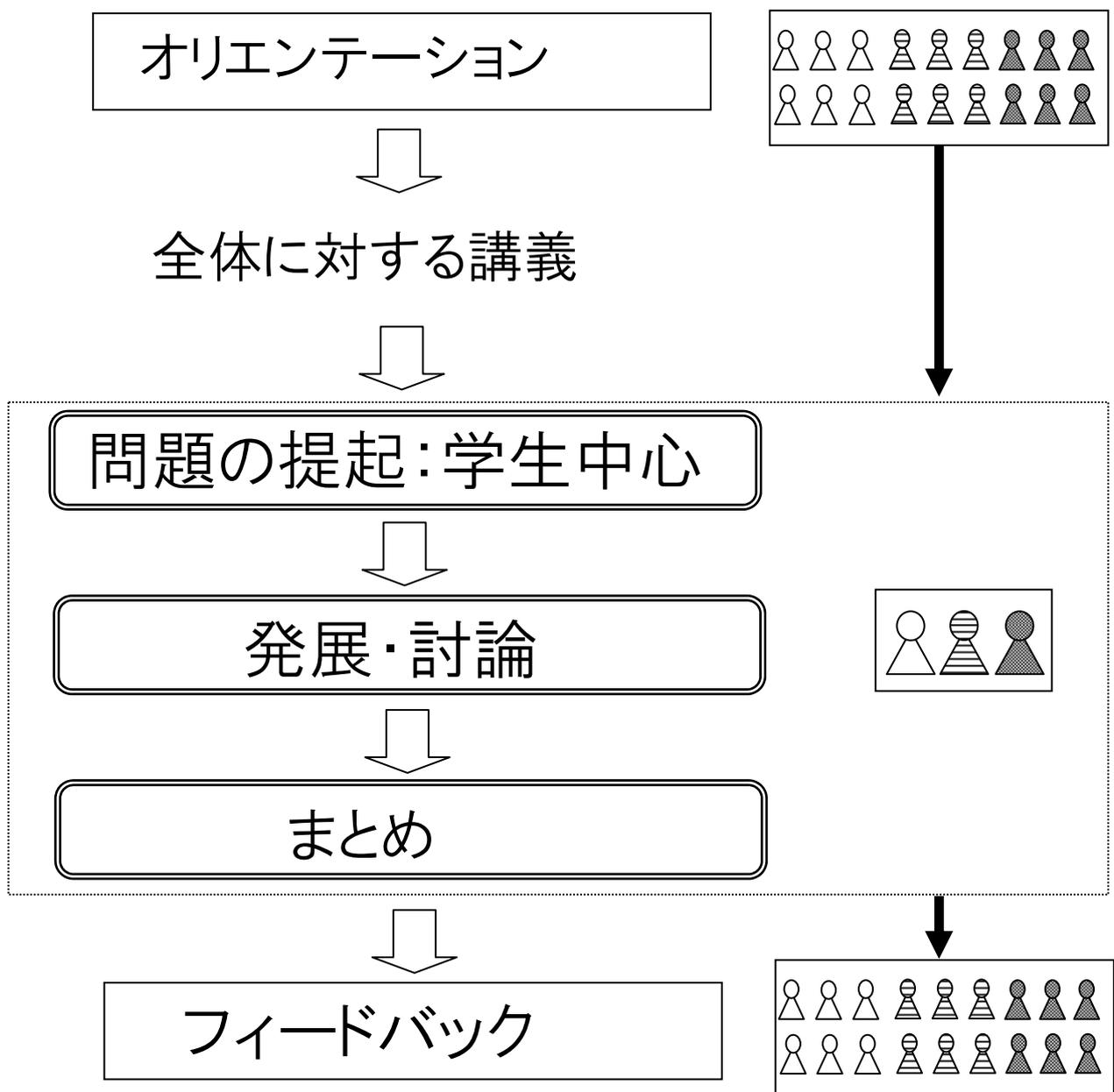


図2 大人数授業法マニュアル化のポイント

WS 7: 教員の意識変化を促す方法

目的 教員の意識変化を促す方法を検討する。

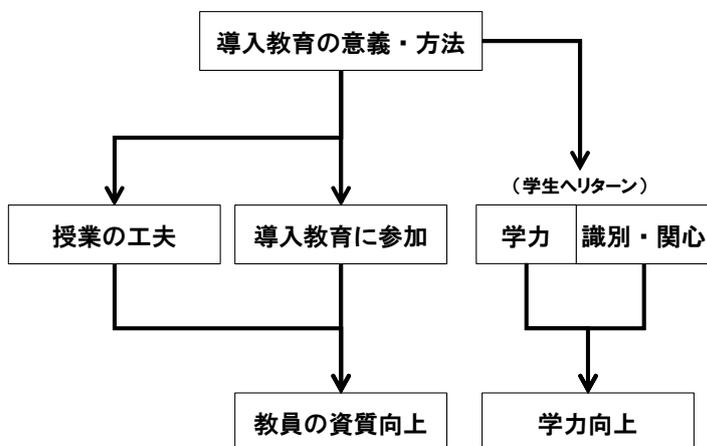


図1. 教員の意識変化を促す方法

どのように意識変化を促すか (3つの提案)

1. 全学共通の一般常識テスト
2. ホームページ
3. FD研修会報告書

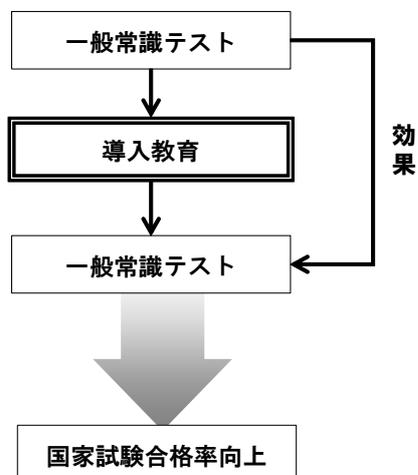
1. 全学共通の一般常識テスト

目的

現状把握と効果の確認

一般常識テスト導入のフロー

導入教育の前後に一般常識テストを実施して、その効果を客観的に計ることで、国家試験合格率向上へ結びつける



2. 大学のホームページ

目的

多様なメディアの活用

ホームページ導入のフロー

ネット上にも導入教育に関する情報を公開して、一人でも多くの教員に導入教育の実態を理解してもらえる環境を提供する

3. FD研修会報告書

目的

より多くの教員に報告書を読んでもらえる環境づくり

FD研修会報告書の活用例

導入教育の成功事例などを具体的に紹介する

教育関連のネットワージャーナルなどを作り論文化する

E天気班

授業科目名:レポート作成の基礎

授業題目名:

医療文書入門、科学論文作法基礎、??

概要

- 医療系専門職業人として必要な、論理的、科学的な作文能力を身に付けるために、講義により書式を学ぶ。また、課題の作文、添削、質疑応答による少人数演習を通じ、具体的な作文能力を身に付ける。

一般目標

- 簡単な科学的な文書が書けるように、科学論文の書き方の書式を知る
- 科学的な文書の書式に従って簡単なレポートを書く力を身に付ける
- 論理的な文章を書くための論理的な思考を身に付ける

行動目標

- 科学的な文書の一般的な書式について説明できる。(大)
- 簡単な論文を短くまとめたり、要旨を抽出することができる。(小)
- 他人に分かるように自分の考えを文章に表現することができる。(小)
- 科学文章の一般的な書式に従って論理的な簡単なレポートを書くことができる。(小)
- 論理的な整合性(はじめに、と、結論(おわりに))のある文書を書くことができる。(小)
- 参考文献の引用を、一般的書式に従って書くことができる。(小)
- 資料からの引用と自分の考えが明確に区別できる文章を書くことができる。(小)
- 誤字脱字のない正しい文書を書くことができる。(小)
- 用語を正しく用いることができる。(小)

回	テーマ	内容・課題	回	テーマ	内容・課題
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。	9	文献検索の方法[大人数演習]	文献検索の方法について学ぶ。大学図書館、MedLineなどの利用方法の具体を身に付ける。宿題：簡単な用語・項目について説明するために文献検索を実施する。課題提示。用語、項目について文献検索しまとめる。
2	科学的な文書の書き方1[大人数演習]	具体例を用いて、論理構成の方法、科学的論文の書式の概要について学ぶ。	10	文書検索課題演習[少人数]	添削した内容について説明する。
3	科学的な文書の書き方2[大人数演習]	要旨とは何か？引用を明らかにすることの意味、事実と推測の違いを学ぶ。	11	良い論文、悪い論文[少人数]	やや長めの論文(A4数ページ)を取り上げ、論文の添削例を示す。質疑応答。図表の書き方の書式。
4	要約演習1[大人数]	与えられたA4で1頁くらいの文書から要旨を抽出。具体例を用いて要約、要旨の抽出の方法について学ぶ。課題提示	12	作文1[少人数]	簡単な作文課題を提示し、作文を行う。
5	要約演習2[少人数]	添削された要約について、質疑応答を行う。長めの課題を提示(課題評価)	13	作文2: 推敲[少人数]	前日に書いた作文について推敲を行う。(再提出)
6	要約演習3[少人数]	添削された要約について、質疑応答を行う。	14	作文3[少人数]	添削した内容の説明、質疑応答。
7	論理構成演習1 [少人数]	簡易書きの項目から、論理的な文書を構成する。課題提示。	15	まとめ、作文4[大人数]	課題提示。短いレポートを提出。独自の視点を盛り込む。(課題評価)
8	論理構成演習2 [少人数]	課題について添削した結果について解説する。			

評価の方法

- 中間提出物: 20%
- 最終提出物: 50%
 - 論理、書式、誤字脱字文法、新奇性、説明充分性、文献活用、図表
- 出欠、態度(各回の提出物等): 30%



E天気班

授業科目名: 気配り概論

授業題目名:

概要

- PBL、ロールプレイを通じて、他者、自分の行動を客観的、複眼的に理解する力を身に付ける。正解を教えるということを目指すのではなく、様々な考え、見方があることを理解させ、医療現場等において常に主体的かつ客観的に物事を判断し行動する力を身に付ける。

一般目標

- 医療人、社会人として、周囲に気を配った行動ができるようになるために、自分の行動を客観的かつ複眼的な視点で評価、判断する力を身に付ける。
- 医療人、社会人としての責任ある行動を行うために、自分自身の行動の周囲への影響を考察できる。
- 他者の行動を他者の立場に立って理解できる。

行動目標

- 自分の行動を、客観的な視点から長所、短所について他者への影響を述べることができる。

回	テーマ	内容・課題	回	テーマ	内容・課題
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。自己紹介、グループ討論(録画)	9		
2	接遇学1 (ゲストも有)	挨拶、行儀作法などの意味、他人への影響などについて概説する	10		
3	接遇学2	ロールプレイで挨拶などを行い、グループでその良い点、悪い点、改善点等を議論する	11		
4	PBL	医療現場での行動について、複眼的な視点で議論を行う	12		
5	PBL(グループ発表)	前回の議論について発表を行い全体で討論する	13		
6	PBL	医療現場での行動について、複眼的な視点で議論を行う	14		
7	PBL(グループ発表)	前回の議論について発表を行い全体で討論する	15	まとめ	
8	ロールプレイ	ロールプレイをして、各役割によって感じ方が違うことを学ぶ			

評価の方法



E天気班

教員の意識変化を促す方法

教員の導入教育に対する 意識調査を行う

- 新入学生の問題点は何か？
- 導入教育とは何かを知っている(Yes or No)
- 導入教育の必要性を感じている(Yes or No)
- 現在実施されている導入教育は何かを知っている(Yes or No)
-

導入教育の説明(今回のFDの冊子を配布、説明)

- 意義
- 授業設計例
- 他大学の取り組み

現状分析

- 現状の授業の中に取り込まれている導入教育的要素の抽出、明示、効果の分析(学部、学科内での情報共有)
- 内容、順序性の整理
 - 不足は無いか
 - 無駄な重複は無いか
 - 時期、順序は適切か
 - 効果は上がっているか
- 学生の学力遍歴の分析
 - 入学成績、学年ごとの成績、卒業時の成績、国試合否
 - 講義担当者の所見
- 学生のニーズ
 - 学生アンケート(全学年に導入教育に対するニーズをきく)
 - 教員への聴取

導入教育の導入

- 個々の学生の成績を把握する
 - 早期の学力評価
 - 学力評価の方法の検討
 - 教員間の情報共有
- 現状の導入教育の再構築
 - 各授業の中で補足
 - 導入教育のための特別授業
 - 不足、無駄な重複、順序、時期

授業の工夫

- 導入教育に関わる授業における具体的な工夫を教員に聴取し、共有
 - 学生の学力把握の方法
 - 評価基準、時期
 - 学生への授業内アンケート
 - 困っていること
 - 助かっていること

- 教員への導入教育に対する意識調査
- 導入教育の説明(今回のFDの冊子を配布、説明)
- 導入教育の学部、学科への適用
 - 学部内、学科内FD

導入教育における文章指導法

一般目標：

医療系専門職に必要な文書を読み書きする能力の基礎を築く。

医療系専門職に必要な文書として想定されるもの=科学文書、電子メール、礼状、紹介状等

文章指導法一般：

それぞれの文書の書式を正しく理解させる（書式、言葉遣いの習慣）

- ・ 様々な文書の書式を示し、具体的な文書を例示し、書式に慣れさせる。
- ・ 学生に実際に文書を書かせて、教員が添削を行い、必ず添削結果をフィードバックする

学生が自分の書いた文章について推敲を行う習慣を身に付けさせる。

- ・ 教員による添削を例示して、学生に自分の書いた文章を推敲させる。

正しい言葉遣いを身に付けさせる。

- ・ 文書の種類に応じた言葉遣い（です、ます調、敬語の遣い方、簡潔さ）を例示。
- ・ 学生に実際に文書を書かせて、教員が添削を行い、必ず添削結果をフィードバックする

書かれる文書の意義を理解させる。

- ・ 文書に必要とされる内容は何かを理解させる。（文書の目的等）

学習到達度の評価基準：

- ・ 書式が理解できているか
 - ・ 言葉遣いが適切であるか
 - ・ 推敲が適切に実施できているか
 - ・ 書かれている内容は適切か
-

具体例：

科学文書の書き方の指導

行動目標：

- ・ 科学的な文書の一般的な書式について説明できる。
- ・ 簡単な論文を短くまとめ、要旨を抽出することができる。(小)
- ・ 他人に分かるように自分の考えを文章に表現することができる。(小)
- ・ 科学文章の一般的な書式に従って論理的な簡単なレポートを書くことができる。
(小)
- ・ 論理的な整合性(はじめに、と、結論(おわりに))のある文書を書くことができる。
(小)
- ・ 参考文献の引用を、一般的書式に従って書くことができる。(小)
- ・ 資料からの引用と自分の考えが明確に区別できる文章を書くことができる。(小)
- ・ 誤字脱字のない正しい文書を書くことができる。(小)
- ・ 用語を正しく用いることができる。(小)

参加者感想

平成19年度北海道医療大学FD合宿研修に参加して

看護福祉学部 倉橋昌司 (Aグループ)

今回のFD合宿研修のメインテーマは「導入教育を設計する」であった。各学部の教育科目表には基礎科目、基礎教育科目、基盤科目という科目群は存在するが、特に導入教育を意識して設計された科目群はない。そこで、FD合宿研修の目的の一つは、「導入教育」について、教員が共通認識を持つことであったように思う。導入教育の有効性の検討が必要だとの意見もあった。本学の教育理念にもあるように、専門職業人への登竜門としての国家試験合格と導入教育の関係についても議論された。導入教育の意味を考える時、国家試験に合格するような学習姿勢の確立が必要であり、それを可能にするような導入教育は有効であるはずである。要は、教育理念を達成するような導入教育の設計と実行ということになる。我々教員は、学生の入学から卒業までの全体を見通し、教育実践しなければならないことを再認識した。

薬学部 居弥口大介 (Bグループ)

二日間にわたるFD研修は、いろいろな意味で貴重な経験であったと感じています。本学には薬学部、歯学部、看護福祉学部、そして心理科学部と4つの学部があり、連携して「医療人」の育成にあたっておりますが、実際のところ、教員どうしが交流する場はそれほど多いものではありません。今回の合宿形式の研修では、非常に過密なスケジュールをこなしていくという特殊な状況もあってか、とても親密で、有意義な意見交流を行うことができたのではないかと感じております。

今回の研修テーマは、「導入教育」でした。入学生が多様化しているなかで大学のブランド力を高めていかなければならない今日においては、非常にタイムリーなテーマであったと感じております。このテーマを中心に多様なバックグラウンドをもった先生方の貴重なご意見を聞かせていただくことができ、今後の大学教育のあり方について、非常に多くのことを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

導入教育は新入生を迎えて、大学への早期適応を促す点で重要である。大学での学習の到達度は初年時に学びの姿勢を確立することに大きく依存している。入学時のオリエンテーションに加えて大学入門講座は種々の大学で行われている。本学でも様々な取り組みが導入教育として行われているが、それが成功なのか、または失敗なのか、改善点は何か、などの結論は得られていない。入門科目として十分な内容と構成であったか、教材開発はどのようなものがあるのか、アンケートなどの調査結果ではどのような評価だったのか、などが不明である。学生の学力や受験での選択科目などの情報もない。今回のFDのテーマである本学における「導入教育を設計する」は基本的な情報をもとに設計を試みる必要性があった。直前に半ば強制的な参加で十分な資料もない中では実質的なものにはならない。あくまでも参考となるだけで時間、投資金額と労力の割には無駄が多すぎる。「教員達が現在でも教育・研究の両立に苦慮しているという現実がある。今回設定した導入教育の授業を実現するためには、多くの人的資源が必要であり、それを担保することの困難さは想像に難くない。」という意見のように理想的な導入教育を構築して行くにはそのバックアップ体制が整っているかも重要な鍵となる。

FDでの参加については、否定的にならずに前向きに考えることも大事かもしれない。学生教育を組織として教員が意識を共有し指導を行っていくことの重要性は誰もが感じていることであり、学部を超えた形で共感が得られている。FDという場を借りてはいるが、多くの先生方との出会いに感謝したい。グループ内での感想をまとめる際の共通項がこの相互への信頼と感謝だったといえる。さらに、FDでの経験は今後何らかの形で今回の経験を自分の講義に活かしていければよいというのが全体的な意見であった。

E班 名称「E 天気」

メンバー 歯学部（田隈、松本）心理学部（榊原）看護福祉（明野、齋藤）
タスクフォース（E 班固定） 衛生士学校（長田）

9月22日晴れ。バスに乗り込みグループメンバーを確認すると一名は欠席のようだ。早速メンバーの欠席者と思われる人に斜線を引く。到着後、すぐにグループワーク開始となった。Eグループの所定の机に着席してみると、元気よく、私たちが待ち受けていたかのようにリードする坊主頭のお兄さんがいるではないか。きっとこの人がEグループのタスクフォースなのだろう。「誰なのだろう」と、思いつつグループ人数を確認すると、「あれれ」所定の人数が存在しているではないか。斜線を引いたその人こそ、元気のいいS先生だった。企業経験があり、この手の研修には慣れているというS先生のリードで、船出することになった。E班のもう一人の立役者はT先生だろう。どのセッションにも毎回大変熱心に質問をされていた。

E班に与えられたテーマは「文章指導」。「どうせ、やるなら本当に使える役に立つものを作りたい」と皆が張り切った。皆が共通に困っていることは、各学部ともに、学生さんが「レポートを記述する力のないこと」だった。レポートを書く方法や文章力を、「1年生のうちに身につけると、学生さんにも、教員にもとても役に立つ」と意見がまとまった。

E班は二日目の担当テーマも、またもや「文章指導」が割りあてられた。実際運用となると、「文章指導」は人手を必要とする指導内容で、一年生担当の先生のみでは難しく、上級学年担当教員も分担しなくてはならなければ、学生の力はつかないだろう。

夜の会も学部を超えた交流ができ、とてもよかった。毎年これが一番の成果かもしれない。「導入教育」というテーマを通じて、今年皆が熱く語り合った内容が一つでも、カリキュラムとして実現できるとよいと思う。

文責 齋藤いずみ

FD 合宿を終えて

北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校
専任教員 長田真美

高等教育では、「職業的社会化」の促進が教育目的の一つとして挙げられる。

今後変化し続ける社会的要請に対応できる実践力をもつ医療職の育成には、「答える力」から「問う力」への教育観の転換が求められる。これを受けて、問題解決力、状況判断力、自己表現力、批判的思考力、人間関係力に代表される汎用的能力が注目されている。これらの諸能力の獲得は教育現場における教育目標でもある。一方、全入時代の到来・ユニバーサル・アクセスが進行し、多様化した学生の受け入れが試行錯誤されている。学生が学習スキルを身につける支援としての教育現場では、学習環境、学習内容に加えて、学生教員間の相互作用を機軸にした教授方略には工夫・改善が加えられている。

将来医療を担う人材に対して行う導入教育は、専門領域の幅広さと深さ、柔軟さを提供する専門教育、教養教育を追求する上で、重要な位置付けとなっている。その導入教育の在り方についての検討を多領域共在の中で重ねられた今回の FD 合宿は非常に意義深いことだと思う。

今回の FD 研修の結果や結果にいたるプロセスからは教育改革への多くの示唆が得られ、「職業的社会化」の支援および FD の本質である「教育の質の保証」に直結していると思う。

FD 感想

「導入教育」の前に

花瀧 馨也（大学教育開発センター）

現在、大学教育開発センターでは、「全学教育」という旗印のもと新たなカリキュラム作りが進められているが、今回の FD のテーマとなった「導入教育」は、「教養教育」という枠組みとともに、新たな教育構想の基本的な柱になるものとして議論されている。しかし、大学における導入教育がどのような目的と内容をもつのかについては、他大学の例を見てもさまざまであり、必ずしも明確にはなっていないのが現状である。本学におけるその導入についての議論もまだはじまったばかりであり、私自身、この新たな概念をどのように位置づけるか大きな戸惑いをもっていた。今回の FD の「導入教育の設計」WS における、授業設計の提案と参加者諸氏による鋭い意見の応酬は、本学に必要な、意味ある導入教育の姿を考える上で多くのヒントを提供してくれるものであった。

WS における議論を通じて、導入教育のあり方を明確にする上で私自身が重要と感じたポイントだけ記しておきたい。それは、新入学生に対する評価のあり方に関するものである。いわゆる全入時代における学力低下への対応として導入教育なるものが必要とされてきたのか、あるいは、本学に入学してきた学生の優れた能力を伸ばすために導入教育が必要とされるのかという視点の違いである。もちろん両者は相互に排除しあうものではないが、WS では、この評価の仕方によって授業設計の内容が大きく異なっていたと思われる。前者の場合、所謂「できない」学生の基礎学力の補習教育、補正教育といった目的が前面に出されるのに対し、後者では、大学教育全般への導入、すなわち大学での学習の基礎能力や、態度、動機づけ教育としての目的が強調される。前者の場合、さらに、専門資格系大学としての本学における専門教育への基礎教育や補正教育という目的を強調する立場もある（多くの大学における導入教育の内容は、専門教育のための補正・補習教育として実施されていることが多いようである。）

はたして、本学の学生は「できる」のか「できない」のか？ 本学の学生の特質はどのようなものであるのか？ 学部や学会における違いは？ 実は、その基礎的なデータについて、私たちはほとんど持ち合わせていないだけでなく、どのようにそれら进行评估したらよいかといったスケールさえ明確ではない。学生の「学力」とは、なにも受験勉強的な能力だけではないはずである。

本学に必要な教育とは如何なるものであるのかといった基本的認識について議論され、共有されることもないままに、導入教育という目新しい「改革」だけが導入されようとしているとしたら、それは形だけのものになりかねないだろう。学生の姿をきちんと見据えたカリキュラムを構築するためにも、まずは、本学の学生の現状把握をきちんと行うこと、そして教員間でその認識を共有し、継続的に議論していくことが必要となるだろう。

5年ぶりのFD合宿研修の参加となった。第一回(平成14年)の合宿研修から月日が流れ、合宿自体についての記憶が薄らいでいた。また、この7月に大学教育開発センターへ所属移動となり、その理由もあったのか初めてタスクフォースの仕事を課せられ、すべてが不安な気持ちでの研修であった。頼りないタスクフォースであったが、参加教員のご協力のもと何とか務めを果たすことができた。改めて皆様にお礼申し上げる。

導入教育を設計するというテーマであった。現在、大学教育開発センターでは全学教育の実施に向けての議論を重ねているところであるが、この教育内容も議論の中にあり、大いに関心ももたれた。若い教員の方たちの参加が多かった。常日頃、学生と距離を密にして教育され、学力や学習態度の劣化に危惧を抱いておられるようで、この教育の必要性を理解するにはさほど時間を要しなかった。導入教育を実施しなければならないという方向性に関しては、FDではほとんど異論は無かったと思われる。

必要であるという認識を共有できたならば、次は行動である。研修ではこの教育内容の設計へとWSが進められ、議論が交わされた。いくつかの想定(目的や授業規模)のもとでの設計、また自由な発想での設計へと、プロダクトのプレゼンテーションが重ねられた。興味深い具体的な行動が次々と提示される度に、実施できればよいが、いや、しなければという気持ちが交雑した。また、実際にどれほどの教員が必要になるのか、などなど脳裏を過ぎった。

FD研修の意義がしばしば問われている。FD研修の在り方自体をFDしなければならないという声がある。これらの議論はさておき、今回のFDは有意義であった。学生の質・学力向上のために導入教育は欠くことのできないものであるという認識を、参加者の間で共有できたことが大きな収穫であった。効果的な導入教育の実施を考えると、少人数での授業形態がどうしても思い浮かぶ。この場合、必然的に教員の多くの参加が要求されることになる。如何に全学の教員が協力し合い、行動できるかが導入教育の実現において問われている。

アンケート・テストなど集計

平成19年度北海道医療大学FD合宿研修参加者プレアンケート

1. あなたは、担当する授業をすすめるうえで、どのような困難を感じていますか。(①)
 2. あなたは、その困難を解決するために、どのような工夫をしていますか。(②)

1)	①	低学年における集中力の低下、遅刻、私語。
	②	口頭での注意、出席をとる時間の変更。
2)	①	教員—学生間の双方向性を維持するために、一人一人が授業中にパソコンを使いながら授業を受けられるような環境を整えたいと考えている。
	②	当別キャンパスではPC必携ではないために、いまは、携帯電話などパソコンの代替となるデバイスを使って、教員—学生間の双方向性を維持するように努めている。
3)	①	実習内容を全員が同等に理解していない場合、個人またはグループの実習の進み具合が極端に異なることがあり、実習室全体の雰囲気たるむことがある。
	②	実習開始時の講義にて手技の細かい所までアドバイスする様にしている。ただ、この場合も実習講義をまじめに聞いている人はより効率よく実習を行い、聞いていない人との実習の進み度合いの差が広がっている可能性も考えられる。
4)	①	全学生が実習課題を最後までやり遂げ、十分なレポートを提出するが、しがしながら実習試験においては、必要な知識を取得していない学生が何人か見受けられる。
	②	実習課題を最後までやり遂げることも必要であるが、実習内容の前提となる理論の理解およびその基盤となる知識の取得もまた重要である。そのため、実習書の予習の徹底、実習前説明の重点化に加え、実習中においては個々の学生との問答を精力的に実施していくことによって学生個人レベルでの理解の確認を徹底する。
5)	①	授業を進める上での困難は特にないが、一般的には私語、遅刻、内職。
	②	私語：私語は決して許さないことを最初の授業で強く言明している。私語する学生には厳しく注意を与える。 遅刻：授業開始後、30分までを遅刻とし、それ以後に入室した学生は欠席にする。遅刻3回で1回欠席としている。遅刻する学生は少数。 内職：板書中心の授業を行う。学生はノートするのに忙しく、内職はできない。
6)	①	学生の興味、集中力低下。
	②	学生の興味を引くようなエピソードを探す。
7)	①	・学生の目的意識、学習意欲がない。約1/3の学生の日常の生活態度が規則正しいものでなく、講義を効果的に受け入れる体制が学生側にない。そのような学生はほとんど定期試験の成績が悪く、また留年の悩みを抱えている。 ・専門領域で、日常の臨床より feed back されるべき教育素材が欠落し、また、日常の臨床の場においてもそのような観点から、診療情報をデータベース化するシステムがない。このままでは数年後には最新の臨床教育を行うことが困難になる。
	②	現在は着任後2月であるので、具体的には対策が実施できていないが、診療情報をコンピュータで一元管

		理するシステムを講座研究費で整備することを計画している。
8)	①	学生の関心を持続的にひき付けて、長時間集中させるのが難しく、メリハリのある授業がなかなか出来ない。
	②	・興味を引きそうな項目を最初に教えて、その後に詳細な部分を教えるようにしている。 ・スライド等を多くして視覚的に訴えたいが、黒板を使用した書き取りも時間をかけて行っている。
9)	①	麻酔科学を習得する上で基本的な医学の常識を欠いている学生が多い印象を持っている。 例えば、大気中の酸素濃度、ヒト動脈血の pH、血液循環、血圧の正常範囲等の基礎知識である。このような前提となる基礎知識を持たない学生にさらにその上に位置する臨床講義を行うことに困難を感じている。
	②	着任初年度の講義および試験で上記問題点に気がついたので、常識的な知識について系統講義、病院実習で口頭試問を行ったり、解説を繰り返す等再確認を行うようにしている。
10)	①	・学生がどの程度講義を理解して実習に望んでいるのかを把握する事が困難であること。 ・実習に対する積極性が、学生毎に極端に違いがあること。
	②	実習中に学生との会話をもち、講義についての理解度を確認している。また積極的に実習に参加していない学生に対して、実習へ参加を促すようにしている。
11)	①	1. やってあるはずの章（別の教員担当）が講義されておらず、それを前提とした講義構築をしているため + α の講義が直前で必要となった場合（打ち合わせはきちりしている）。 2. 別の教科での内容が講義されていない、もしくは学生が全く理解していない。 3. 学生の学力格差。 4. PBL は格差が付きやすいので注意。
	②	1, 2 : 図解などをして説明。 3 : 質問に来れば、説明。講義では身近な具体例やマンガなどを描いて図解など。
12)	①	・4年生になるまでの必要な学力が不足している。 ・授業中、他の事をしている。
	②	・ある程度、基礎的な事を説明してから授業している。しっかり勉強している学生にとっては、復習の時間が長くなり、つまらないと思われると思うが、図解やスライドで今後どのように知識を応用出来るか教えている。 ・授業に興味を持ってもらえるように、図やスライドを使っているが、他にも工夫を考えている。
13)	①	・担当科目を学習するための基礎知識において、学生間の差が大きい。 ・科目に対する取り組み姿勢にも学生間で大きな差がある。
	②	プレテストによる学生全体の基礎知識の把握により、授業内容を工夫する。
14)	①	授業に集中していない（私語の多さ、授業途中の教室の出入り）
	②	・「聞く・書く」に集中してもらうことを狙って、配布資料を穴埋め式にしている。 ・授業内容の重要性を理解してもらうために、その日の内容に関わる国家試験の過去問を紹介している。
15)	①	語学の授業としては、1 クラスの人数がかなり多い。
	②	できるだけ多くの学生に指名する。毎回小テストを課し、次回に返却して学生の動向を知り、学習の積み重ねを促す。

16)	①	学生の2極化：半数は普通の授業でも何とかついてくることができるが、10名前後は基礎学力がなく、指導が相当難しい。
	②	<ul style="list-style-type: none"> ・雑談などを入れ、出来るだけ授業を面白くし、集中させる。 ・教える項目をすぐ教えず、学生にクイズ風（3択あるいは5択）に出して、全員に挙手させ答えさせる。
17)	①	今のところ困難は感じていない。
	②	<p>困難を解決するためでなく、授業に集中できるよう工夫をしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の冒頭に質問を提示する（毎回学んでほしい到達目標になっている） ・B6サイズの用紙に、名前、質問に対する答えや考えを記入してもらう（出席カード） ・授業の最後には質問に対する答えや、私の考えが明らかになるように授業を進める（学生は最後のまとめで訂正をすることで、講義の整理をする） ・配布資料は毎回A3サイズ1枚に収める。左に用語の整理、右は図表などスライド以外に必要な情報を貼り付けてあり、授業のスライドを左に書き取ることでノートになる。 ・臨床の実際に結びつく事例、視聴覚教材は積極的に取り入れている。
18)	①	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと内容を濃くしたいが、時間がない。 ・授業中に無関心な態度を取る学生に、どのように指導したらよいか。 ・積極的学習姿勢をどのように植え付けるか。
	②	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の予習の指示。関連テーマのレポート付与。 ・意欲を高めるために、身近な話題を提供したり、臨床の姿を語るなど。
19)	①	時間が十分でない。
	②	要点を中心に講義。
20)	①	毎年、年齢は同じであるが、自分との年齢差が広がっていくため、彼らがどのような生活感を持っているのかが把握できなくなることがある。
	②	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回の講義のとき、ガイダンス後自分の自己紹介をしてから、学生各自に「自己紹介シート」を書いてもらっている。これには自分が住んでいる「町」の自慢、あるいは「家族についての自慢」を書いてくださいとお願いをしている。 ・講義開始時間前および講義終了後に学生たちと話をする時間をとるようにしている。
21)	①	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強の仕方がわからない。 ・自分で考えて学習・行動できない。 ・自分のペースで行動する。
	②	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に助言する（わかりやすい本を教える、考え方を示す）。 ・段階を追って指示を出す。 ・不適切な行動の指摘・注意をして本来すべき行動を指導。
22)	①	学生に媚びようとするれば、ついおもしろい、わらえる、やさしい方向へと行きそうになるのを、わからない、むずかしいことへも学生が立ち向かうよう仕向ける工夫と硬軟のバランス。
	②	学生の「考えるきっかけ」をつかむよう、できるだけ知的好奇心をあおる新鮮な材料を仕入れるだけでなく、あえてたった一人の学生だけがくらくらするような、あるいは、10年、20年、いや50年後にその味が「わかる」かもしれない問題も献立の一品に入れるようにしている。

23)	①	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えて行動することが難しい。 ・状況をよむことが難しい。 ・一度言ったことが理解されない。
	②	<ul style="list-style-type: none"> ・前もって考えられることを列挙し、対応する。 ・昨年度の失敗を挙げ、対応策をあらかじめ考える。 ・何度も根気よく指導する。
24)	①	時間数に対して理解をねらう基礎的知識の量が多い。
	②	理解度を測定するために、重要用語に関する小テストを実施。
25)	①	赴任直後であったため、今年の3年生に、表現力・思考力・想像力・理解力がどの位あるのかが見当がつかないなかでのスタートであり、また就職希望者（心理臨床職以外）の割合が多い集団でもあることから、「カウンセリング」のおもしろさ・厳しさをどう伝えるかに腐心しつつ進めた。（今年度に関しては、特に困難は主観的には感じていない）
	②	<p>1. まず初講において、ミニレポートを課し、それを読むことによって、各学生の持つ力がある程度見当をつけている。確認された、各自が既に持っている知識や興味をつなぐような講義としていく。また、今後サポートが必要になるかもしれない学生をこの時点でマークしている。</p> <p>2. 基本的に毎回ミニレポートを課し、そのフィードバックを次の講義で行い、理解の確認、誤解の修正を行う。そうすることで、全員が少なくとも基本レベルをクリアできるように心がけている（ドロップアウト防止とも考えている）。また、自分自身の教え方へのフィードバックにもなっていて、説明の仕方を工夫したりしている。</p> <p>3. ロールプレイなどの「体験」を多く含む内容であるため、一回でも休むと授業の進みについていけなくなる。休んだ場合には、「補充」を提供している。</p>

3. あなたは、学生の成績評価をどのように行っていますか。(①)

形成評価（中間試験での学生の学習と学力、および教え方のチェックのための試験）をしていますか。(②-a)

している場合の回数はどうですか。(②-b)

形成評価の結果をどのように学生にフィードバックしていますか。(②-c)

1)	①	筆記試験による客観評価
	②	
2)	①	出席日数と授業毎に提出の課題とを総合的に評価
	②	<p>課題は毎回電子メールで提出してもらっているが、次週の授業までに課題に対する評価・課題についての質問の回答を、全員へ電子メールで返答している。</p> <p>b. 最初の講義を除く14回</p>
3)	①	実習態度、レポート、試験
	②	a. 行っていない。
4)	①	授業態度、レポート（提出状況、内容）、実習試験により総合的に評価
	②	

5)	①	前後期の定期試験に実習レポートの点数を若干プラス
	②	
6)	①	講義試験、実習レポート
	②	a. 行っていない。(入学生の質に大きな変化があるとは認識していない)
7)	①	出席、定期試験の点数
	②	a. 行っていない。(形成評価を試験直後に行えばすごく学習効果があると思う)
8)	①	・定期試験 ・臨床実習では、出席状況、実習態度、レポート、口頭試問の総合評価
	②	a. 行っていない。
9)	①	・第4学年については、筆記による前期後期試験を行い、採点基準を設けて採点し、厳密に判定。 ・第5学年は、それに加えて実習への出席、態度、レポート等も加味して評価
	②	a. 行っていない。
10)	①	実習時の授業態度、実習レポート、実習発表会
	②	a. 行っていない。
11)	①	試験
	②	a. 行っていない。(無記名で質問やわかりにくかったところを自由記載で書いてもらい、授業後回収、次の講義で説明)
12)	①	期末試験、授業中に聞く事
	②	a. 実習中の口頭試問 c. 理解していない場合は、どこを覚えて、何に必要か教えている。
13)	①	試験
	②	a~b. 中間試験の位置づけではないが、毎回の授業の重要事項についての設問を課し、回答内容を点検し、5回の授業毎に返還している。
14)	①	講義：定期試験 演習：定期試験、実技試験、小テスト 卒業研究・総合演習：卒業論文に関する内容を講座で作成したチェック項目で点数化
	②	a. 行っていない。
15)	①	マニュアルに従って点数化(実習)
	②	a. 行っていない。
16)	①	小テストを含む平常点、定期試験が 4 : 6 ~ 5 : 5 程度
	②	a. 形成評価の意味がよく分らないが、毎回の小テストを返却し、質問を受けている。
17)	①	レポート、小テスト(10分間テスト)、中間テスト(数回)、期末テスト
	②	a. 行っている。(学生のテスト成績を早期に出せることは、問題児を早期に見出せるばかりではなく、その後の授業の教え方にも反映させることができる) b. 数回 c. 成績順に上位10名ほど答案を返す。それ以外は、学生番号順に返す。成績に順じ、評価スタンプあるいはシールを貼り、学生に意識を促す。

18)	①	期末試験、出席、演習の取り組み
	②	a. 特にはないが、毎回質問カードをチェックしていく中で、学生の日本語力、漢字力、授業の理解度などを知るように努めている。
19)	①	一定の出席者を対象に試験成績でバツサリ。
	②	a. 行っていないが、今期より単純な小テスト（思考力涵養のための論述試験）を試みる。 また HP を活用した教育コンテンツの配信、小テスト（これは作問の蓄積が必要なため時間がかかる）、レポートのやりとり、掲示板による情報提供やメンタリングを試験する予定。
20)	①	定期試験、レポート
	②	a. 行っていない
21)	①	・ミニテスト ・通年科目であるが前期末に中間試験を行い、教え方の振り返りをしている。 ・後期末に試験を行い、総合点で成績評価
	②	c. 学生の理解できる事例を提示するように心がけている。
22)	①	医療職になる、言語聴覚士になるという視点をもっているかどうか（レポート等）、自分なりの努力や工夫が見られるか、助言や注意をどうかするか、基本的な学力はついているか。
	②	
23)	①	レポート
	②	a~b. 毎回、講義の内容とやり方に対するコメントを提出してもらい対応している。最終レポートまでに数回のレポート添削を行った。
24)	①	成績評価に関わっていない。
	②	a. 講義を持っていないため行っていない。
25)	①	中間評価、定期試験
	②	a. 行っている。 b. 6 コマ中 2 回 c. 小テスト後の授業で、全体の傾向と誤りが多い用語について解説する。
26)	①	期末試験点数に、中間試験点数の 1 割を加算して、最終評価とする。 (中間試験は、期末試験に準ずる形式・内容・難易度とし、期末試験に向けての「練習」の意味も含めている)
	②	a~b. 中間試験は 1 回であるが、毎回ミニレポートを課している。 c. 中間試験は採点后返却し、個別の簡単なコメントと、全体に向けての「講評」の形でフィードバックしている。

4. 学生の学力を識別できるような試験を行っていますか。(①)

低学力の学生の成績をあげるためにどのような工夫をしていますか。(②)

1)	①	特に行っていない。
	②	授業数が少なく（1学年2学年各2回）、特にしていない。
2)	①	1つの課題を細かい技術要素に細分化して、技術要素ごとのスキルと全体的にまとめ上げるスキルとを総合的に評価している（具体的には、たとえば文書作成の場合、書式を設定するための技術要素と、文書全体としてのまとまりの2つの観点から評価する）。
	②	細分化された技術要素の中であれば、必ず幾つかの優れた部分を全員が持っているので、毎回の授業の中で、学生への部分で自分が優れた技術要素を持っているのかを伝えるように努めている。
3)	①	実習態度、レポート、試験により行っている。
	②	実習なので、進み具合が遅いまたは理解せずに実習を行っているような学生にはその場で声をかけて個々に説明、ディスカッションを行っている。
4)	①	難易度の異なる問題を入れることにより、各学生の学力を識別することができる試験内容にしている。
	②	各学生の理解度を把握するため、実習中は極力、全学生と問答をすることにより、必要な知識を理解しているかどうかを確認するようにしている。
5)	①	定期試験の結果で識別することが可能。
	②	呼び出して個別指導を行っている。
6)	①	マークシートを使う客観テストなので、学力、問題の良否等の識別は可能。
	②	留年生のカウンセリング（相談）。再試験前の補習授業。
7)	①	特に行っていない。
	②	講義中に居眠りをしている学生に集中的に重要項目の質問を頻発して、注意を喚起しているがあまり学生側がその意図に気がついていない様子で、効果のほどは不明である。
8)	①	選択肢マークシート形式で行っている。
	②	基本的な練習問題を多く解かせる。
9)	①	設問の工夫により行っていると思う。
	②	歯科麻酔科学分野では主に点数により成績を厳密に判定している。前期試験で極めて点数の低い学生（後期試験で満点近く取らなければ合格できないもの）は呼び出して面談している。
10)	①	実習発表会、発表会時の小テストを行っている。
	②	実習講義を出来るだけ、わかり易くかつ丁寧に行うこと、ならびに視聴覚資料の使用により、学生がより実習に対し興味を持つことが出来るような内容を使用している。また実習への積極的参加を促し、実習時に個人単位での説明を行っている。
11)	①	行っている。
	②	・本人がやる気になれば、個別対応。 ・心理的なサポート：必ずどこか勉強できる部分があるので、そこを突破口にする。褒める。
12)	①	基本的な問題、5年生に登院するために必要と思われる問題を出している。
	②	実習中に応用することを聞いたり、質問したりして足りない部分を補っている。
13)	①	定期試験のみ行っている。

	②	補講を考えているが、なお実行していない。
14)	①	成績評価（定期試験、実技試験、小テスト、卒業論文に関する内容を講座で作成したチェック項目で点数化）以外の試験は行っていない。
	②	本人との出来高のやりとり、記録物に関する指導、実習室での実技指導など別の対応。
15)	①	行っていない。
	②	実習に限って言えば、その学生なりの到達目標を考えて、そのためにどれだけ努力したのかといったプロセスも評価するようにしている。
16)	①	行っている。
	②	毎回、否応なく復習する仕組み。1回分は少なくなくて済むので、やればできる、という気持ちを起こさせる。
17)	①	行っている。（最高でも満点がいなく、平均点が60～70点位のテストを出すよう心がけている）
	②	軽いプレッシャーをかける。「がんばろう」シールを貼り、自覚を促す。 自宅での予習・復習の学習時間を確保するように指導する。
18)	①	特に行っていない。
	②	特にしていない。
19)	①	行っていない。（学生の能力を細かく知りたい。学習管理を徹底したいと願っている。私の持論はそういうためにイーラーニング導入、である）
	②	特にしていない。強いて言えば興味を持ってもらうように、「そのむき」の人たち向けに話題を豊富に用意しておくなど。
20)	①	行っている。
	②	追加説明。
21)	①	行っていない。
	②	
22)	①	前期科目の責任者が作成し、実施。
	②	個々のレベルに合った対応。
23)	①	レポートによる判断、知識よりも視点や論述の能力に重点を置いている。
	②	まずは、あいさつからはじめる生活指導。
24)	①	講義をもっていないので、行っていない。
	②	実習については、経験し、失敗したことにつきあい、その後できるだけ次にどうしたらよいか、考えられる状況を設定したいと思っている。
25)	①	国試出題頻度が高い問題を作成し、特に必修問題により近い問題を間違える学生をチェックする。 自分の考えを言語化できているかを見るための記述問題をつくる。
	②	個別に臨地実習で担当したときに、学習能力がわかるので、個別に関わっている。（資料、書籍を指導中に一緒にひらき、考えさせたり説明する）
26)	①	選択肢形式、論述形式など異なる形式のものを組み合わせることで、結果から見ても、識別できているのではないかと考えている。
	②	フィードバックできる場面を活用して、良く出来ているところを褒めつつ、つまづいていそうなところから抜け出られそうなヒントを、記したり伝えたりしている。

5. 低学力の学生も国家試験に合格するようにするには、どのような教育が必要と考えますか。

- 1) 早期より自主学習を習慣づける工夫。
- 2) 教員—学生間の双方向性も重要なことのひとつであるかと思う。ただ、そのために、毎週（半期で15回）100名以上の学生と面談することは非常に困難ではあるが、IT（PC、ネット、メール）を用いることで、毎週100名以上の学生と個別にコミュニケーションをとることの実現性が高まるのではないかと思う。
- 3) 国家試験に対する総合的な学力を身につけるには、専門性の高い各分野の教員が講義を行うだけでは不十分である可能性がある。国家試験に必要な各分野の関連性の理解など、効率の良い学習を提供するには前年度の国家試験を経験した卒業生（大学院生）などをチューターとして小グループでの自主学習制度の整備を行ってもよいかもしれない。
- 4) 学習の差については、授業内容の理解力の差によるものもあるが、一方では単純に個人による学習量の違いによるものも大きい。そのため、低学力の学生については、高学力の学生と同等以上の学習量が必要であり、集中的に十分な量の演習課題を与えて解答させる方法が考えられる。
- 5) 学生のモチベーションを高める教育。厳格な成績判定が必要。留年の危険性を感じなければ、特に下位の学生は勉強しない。
- 6) 低学力の原因を明確にする。勉学の習慣があるかないか、ギャンブル等にはまっていないか、精神的な問題がないか、基本的な能力不足はないか。能力不足の学生に、早期の進路変更を勧めるため、2学年4年在籍制限等を導入する。同時に、学生表彰制度の幅を広げ、アメの要素を増やす。優良教員の表彰等、教育に対するアメの比重を高める。
- 7) 低学力の学生は基本的な能力より、日常の学習態度の獲得がなされていない方が圧倒的であると思う。そのような学生は寮形式の学習環境や、特別クラス（補講クラス）を設けて、基本から応用までの段階的宿題形式の演習の繰り返しによる学習態度の獲得、達成感の実感、そして学習意欲の獲得をはかり、その結果として必要な知識の獲得を図る。
- 8) ポイントをしっかり押さえて何度も繰り返し教え続ける。
- 9) いやしくも患者に直接医療行為を行おうとするものは、須くその責任の重さを自覚するべきである。それが出来ない者は仮に歯科医師となっても、患者のみならず、家族や周囲の人々にも大きな迷惑をかけることになり、本人の生活も立ち行かなくなるだろう。初年度、前期試験で著しく成績の劣る学生数人を直接呼んで、このような話を行い厳しく自覚を促した。すると彼らのほとんどは後期試験で合格ラインに達した。そして本年度、彼らの病院実習の態度は立派である。歯学部学生は歯科医師を目指して入学しているのであるから、低学力の者であっても本来能力があるのだと思うのかもしれない。察するに、彼らは「石にしがみついても」必死に勉学するということを経験したことがないのかもしれない。私はこの設問に対して明確な答えを持っている訳ではないが、この経験から、より良い講義を工夫し続けることとともに、折にふれて学生本人の自覚を促してゆくことが必要だろうと考えている。
- 10) 卒業年までの基礎的な学力の向上と、卒業年における国家試験に向けた的確な講義を行うようにする。卒業年までの学生の成績を理解し、学生単位での講義方法の模索を行う（補講など）。過去問や出題傾向など常に国家試験の情報を最新のものにして、それを学生にフィードバックする。
- 11) 学生側—①基礎学力 ②学生同士の相互サポート ③本人のやる気と自信
教員側—①教授という名前に見合った講義回数と内容（あまり人任せにしない）。
②教員の基礎および専門学力のレベルアップ。

- ③学生の良い部分をきちんと評価し、「だめ」「もっと勉強しろ」とかやる気をなくすような言葉は慎むべき。
 - ④教員側も大学で評価されなければ、やる気をなくす。
 - ⑤授業評価アンケートは見直すべき。学生からは不評。
 - ⑥自分自身がちゃんとやっていると思っても、学生はそう見ていない。この現実を知るべき。
- 12) 学力別に少人数制にする。無理に上の学年に上げない。
 - 13) 少人数教育。
 - 14) 授業の意見などを記載してもらったり、グループワークを活用したりといった、考えられる力をつけるためのアプローチ。
 - 15) 「勉強の仕方がわからない」「勉強する習慣がない」といったケースであれば、その学生にあった勉強方法を一緒に考えたり、勉強の習慣化を助けるような働きかけが必要だと考える。
 - 16) 合格することにこだわるなら、テスト対策のテクニックを教えるのもありかもしれない。
 - 17) 直接関わっていないが、積み重ねという点で、問4の低学力の学生の成績をあげるための工夫（毎回復習する仕組。1回分は少なく済むので、やればできるという気持ちを起こさせる）のような考え方は通ずるものと思う。
 - 18) 国家試験対策講義を行う（9月から要点講義、問題と解説、重要事項の再確認）。
 - 19) 国家試験形式の模擬試験、卒業試験で実力を養う。
 - 20) どうしても難しい学生は入学時でもそうなので、そういう学生は入れないようにする（各学生の入学後成績とその学生の入試方式との対応をフォローアップし、学力不足の学生が入ってくる
 - 21) 過去問などを利用した模擬試験など。
 - 22) 個別能力のマッチング。動機の引き出し。体験学習とのリンケージ。実力診断。
学習フォロー。メンタリング。成長のプロセスを実感できるカリキュラムを。あらゆる弾を発射する。
 - 23) 反復指導。
 - 24) 目的意識を持たせることが必要であると思う。
 - 25) 基本的事項を確実に学ばせる。個々の能力にあわせ個別対応をする。国家試験のためだけの知識優先で覚えるだけの学習になりかねないが、これは避けたいと考える。医療職としての心もち、自分で学ぶ力を養った上で合格へ結び付けるには、やはり1年生からの意識教育も含めた学習指導が必要だと考える。
 - 26) 少数ゼミでの指導に重点を置き、学生同士が受験にむけて自主的に切磋琢磨する環境づくり。そして残念ながら、予備校・専門学校にならった受験に特化した教育プログラム？
 - 27) 国家試験は、ポイントを押さえることが必要だと考えるので、問題点の抽出ができるようにする。また、勉強するくせをつける。
 - 28) 業者の模試を受けさせるだけでなく、担当教員が仮想問題をつくり、少人数教育により個別的に学生の到達度を把握する。

6. 教員が一致して教育力向上を図って行くには、どのように教員を参加させるのがよいと考えますか。

- 1) 現在の担任制を早期より活用し、自主学習を習慣づけるべく、少人数を対象として指導に当たる。
- 2) 前職では、毎年、教育手法に関する意見発表・交換の場（教育訓練手法の報告会）があった。この報告会には、個人的には毎回楽しく参加できた。特に、他分野の先生の意見（たとえば、旋盤で如何に美しく穴をあけられるように学生に訓練させるのか、など）も大変興味深かった。このような意見発表・交換の場があれば、教育力向上を図るための1つの方法になるのかとも思う。
- 3) FD研修会などで行った成果を、できるならダイレクトに教育の場で実践し、その成果を大学教育センターへフィードバックできれば良いと思う。
- 4) 各教員が、自己の教育能力を自覚し、問題意識を明確にもつことが必要である。
- 5) 「参加」とはFD研修への参加のことか。特に名案はないが、参加するとプラスになると実感できること。
- 6) 学生の授業評価の高い教員と低い教員を、同じグループに入れて意識改革を図る。
- 7) 以前より泊まりがけの合宿形式には疑問を持っていた。教員同士の意思疎通とお互いの理解、懇親のためには有意義と思うが、FDを行うには必ずしも泊まりがけは不要と思う。それよりも、朝一から夕刻まで、たとえば講義室でのワークショップを数日に渡ってカリキュラムに従ったFD開発を行うほうが良いと個人的には考えている。
- 8) 教員相互に共有して効率良く教育する。
- 9) 私が教育を受けた山形大学医学部での学生時代や、自分が卒後に講義・実習等を行った経験からすると、本学の教官は教育に関してははるかに熱心だと感じている。そして、今回のような研修を重ねさらに教育力向上を目指している。したがって、本設問に対しては現時点で特にコメントすることはない。ただ本学には医学に関してそれぞれの専門分野で優秀な教官が揃っているのも、学部を超えた教官や講義の交流があっても良いのかなという感想を持っている。例えば、希望する歯学部学生が音楽療法や精神医学等を受講することは医学教養の向上のために有用だろうと思う。
- 10) 個々の教員に対しての意識改革を合宿形式にて行う。その後、大学全体あるいは学部単位での年1～2回程度の会合と意見交換を大学にて行うようにする。
- 11) ①この設問はBackgroundを知らずして、論文を書くのに似ている。また、上意下達方式では何も変わらない。少なくとも、数値根拠などの提示が必要。
②真意は何？教授が本来やるべき講義から回避するための方便ではないか？
③各講座でそれぞれの授業（講義、実習など）で誰がどのくらい受け持っているか。バランスの妥当性は？
④これまでのFDの効果および評価が不明。
⑤大学教育J（徳島大学）などで同じような問題が論議されているので、あらかじめ現状は個々で考えることが必須。どこもおなじような問題をかかえている。
⑥基礎と臨床では対応が異なる。
⑦講義と実習の関連づけを上手に。
- 12) 全体として問題点に対して、どのように取り組むか同じ方針で行う。
- 13) 入学から卒業までのカリキュラムの中で、担当科目の役割を十分理解し、教育することは、教員の業務である。教員は教育に参加するものであって、参加させられるものではない。教員が自ら教育力を向上させようと思うFDプログラムが必要と考える。（大変難しいと思うが）
- 14) 目的・方法の精選、役割の明確化。

- 15) 何に教員を参加させるのか、質問の意図がはっきり理解できないが、無駄なく漏れなく教育するための教員間・領域間の連絡と連携があれば、自ずと、教員の意識は高まるのかもしれない。
- 16) 他教員の実践する授業について知り、考える機会があるとよいと思う。
- 17) 反対意見を封じ込めず、全教官から出るいろいろな意見を謙虚に聞く（各教官に考えさせる：教官の意識改革にもなるはず）。
- 18) F D委員会は大きな方針・対策を決めるだけで、実際の施行に関しては、やり方を画一化するのではなく、できるだけ個性を尊重するようにする。ただし、結果責任は各教官にあるので、それも含め、教育実績については評価委員が評価する。上から物事を押し進めるのではなく（押し付けとなり、官僚的管理になりがち）、各学部・学科の若者（准教授・助教）だけで構成する委員会でまとめた意見を、教授も含めた委員会（全体としてどうしてもまずいというものだけ外す位の調整会議）で検討し、実行するようなことをしないと、「笛吹けど踊らず」状態になる。改善すべきは早急に改善する（時間を区切る）。人望者（学長）による説得（各教官へのお願い）が大切である。
- 19) 全員が参加できる会議利用した研究討議、F D研修。
- 20) 現状、カリキュラムがばらばら。透視性を確保。科目によって指導に強弱をつけること。私の現在の講義科目はどちらかといえば補完的科目。
- 21) 難しいことだと思っている。
- 22) 各科目・担当教員によって考え方の差異があるのは仕方がないが、全体でのオリエンテーションを行うなど各教員が全体を把握した上で、学生指導を行うのが望ましいと考える。
- 23) 教員同士が互いの教育や研修について日常的に対話でき、互いに信頼し合える環境づくり。
- 24) それぞれの価値観を認め合い、教育をしていくにはそれぞれの教員の力が必要不可欠であることを伝える。
- 25) 他教員の講義を聴講してみると、自分の講義の行い方の長所・短所が見えるようになるかと思う。自分の教え方の改善点も見えやすくなるように思う。また、講義を受ける側（学生側）になる経験を通じて、学生にとっての「わかりやすさ」が実感され、共有化され、具体化されていくのではと思う。

ポストアンケート総合評価集計

アンケート集計

ワークショップ総合評価

1. 導入教育について

	理解できな かった	理解できた	無回答
意義	0	35	1
必要性	1	34	1
方法	1	27	8

2. 本学において、導入教育は必要と考えますか。

・強く必要である。	12
・必要である。	23
・どちらでもない。	1
・あまり必要でない。	0
・全く必要でない。	0

そう考える理由は何ですか。

「強く必要である」

- ・基本的な学力がないと。基本的な学習態度の獲得がないと。すでに国試に対応できない現状にある。
- ・現在、薬学部基礎セミナー（化学計算）導入教育を担当しているが、化学通論Ⅱ追再試験の合格に貢献できていると信じているから。
- ・学生が基礎学力不足のため、1年間の学習が身に付かないという例を見ている。
- ・幅広い学力層の学生が在籍している。
- ・学生教育の充実は大学の生き残りに重要であるため。
- ・学力・意欲が低下していると感じているので。
- ・専門教育に進んだ際の理解度（Drop Outを出さない。）
- ・1年生の学力…1年生の目的意識が乏しい。3年生になってもまだ現実感が乏しい人がいる。
- ・入学の時点で学生の学力に差があるため。
- ・高校までのスタディスキルと大学でのスタディスキルのつながりがあることによって専門教育が円滑に進行すると考えられるため。
- ・キャンパスライフをスムーズに始めることができると、ドロップアウトや留年を防ぐことができる。また、1年前期の導入教育の効果は、動機づけ・自主性・主体性といった形で長期にわたっていくのではないかと考えられる。（本大学での）「大学生活」の満足感が上がるのではないだろうか。

- ・現に学生を教育している。

「必要である」

- ・高学年を教えている時に実際に感じることもあるから。
- ・勉学する意識が低い。授業態度が良くない。
- ・量的改善には制限や限界にきている現状では“学び方”の支援は質的改善の中心軸になると考えるから。
- ・学力の二極化
- ・専門科目（1年次）の中で、導入教育の内容が含まれていることもあるので。
- ・大学教育の基礎教育と考えられるから。
- ・基礎学力とモチベーションを向上する事が、卒業後、国家試験への合格率へ大きく影響する事ができる。
- ・国家試験（最終目標）と関連する。大学の対社会的貢献度を高めることになる。
- ・勉強法を体系的に学ぶ機会がなく、勉強法が身につけていない学生がいるから。
- ・導入教育により学生の力を伸ばす。より効果的に授業をすすめることが出来るから。
- ・初学年教育の充実は今後ますます必要になると思うが、導入教育科目を新たに設けるかどうかを検討すべき。
- ・国試の合格率に影響するため。
- ・学生の精神的な支えと今後の勉強の導入として。
- ・今回のテーマ通り、入試の多様化が進んでいるが、卒業時には国家試験レベルに達していないといけないから。
- ・2年次以降の講義がスムーズに行える。
- ・導入教育を行うことで、高学年になった時に繰り返し（思い出して）教えることが出来る。6年間という歯学部教育に対し、モチベーションを持つことで、勉強に対する意欲がわく。
- ・新入生の質の変化
- ・これによって効果的に授業が展開でき、安定着実な学習成果へとつながった結果、国試合格率、入学生確保という形で学生はもちろん、大学にもメリットが大きいから。
- ・学習に対するレディネスを早くから備え、集中する力をつけるため。
- ・学力の二極化を実感しているため。
- ・一応効果を示している大学がある。
- ・今の学生は…というだけで済ますのではなく、であるならばどうすべきかを考えていく必要はあると思う。
- ・学生の目的意識をはっきりさせ、学習効果を高める必要があると感じた。

「どちらでもない」

- ・学生の現状把握が一般的で、本学における問題目標が明確ではない。

3. 導入教育は、国家試験の成績に関係があると考えますか。

・強くそう考える。	13
・そう考える。	18
・どちらでもない。	5
・あまり考えない。	0
・全くそう考えない。	0

そう考える理由は何ですか。

「強くそう考える」

- ・学習方略に成績が大きく左右される。
- ・基本的な学力がないと。基本的な学習態度の獲得がないと。すでに国試に対応でない現状にある。
- ・基礎セミナー（化学計算）しかわからないが、国家試験に重要な科目と信じている。
- ・導入教育が必要である場合、行うことで学力向上につながる。
- ・基本的な勉強をする姿勢が国家試験の勉強にも不可欠であるから。
- ・データが明らかになっている。
- ・導入教育によって専門教育の習得度にプラスになるため。
- ・自ら正答を作る（模擬試験等）ことで習得が身に付く。
- ・学習の習得、目的意識の形成は成績と大きな効果を持つと考える。
- ・そういうデータがあると研修中に伺った。
- ・自分の経験も踏まえて。1年次より100%の合格と言われて育ってきていたため、そうするのが当然だと思っていた。そのため、学習への危機感も常にあった。
- ・基礎的な学力がなければ専門的な授業が理解できないため。

「そう考える」

- ・早期に対策しないと気づいた時は手遅れ。
- ・①専門科目でどれだけ教育内容を精選出来るか、その方法の工夫によって目標達成は可能
- ・②導入教育の成果が4年次にどう影響するか予測できない。（本学のデータがない。）
- ・しっかりした基礎教育は基礎学力と関係し、大学教育の総合が反映する。国試成績とは当然深い関係があると考ええる。
- ・今後の目標・目的を明確にする事で、その後の学生生活が改善し、学習への意欲が向上する。
- ・国家試験の成績というよりも寧ろ学力全体と関わる。
- ・上の結果からも感じる。（国家試験（最終目標）と関連する。大学の対社会的貢献度を高めることになる。）
- ・国試合格には低学年からの学習の積み重ねが不可欠だから。
- ・初期から全体的な知識レベルを向上させないと、卒業間際で間に合わなくなるから。
- ・通常の科目の理解のスキルが上達するから。
- ・基本的な学習能力 up は国試勉強のための必須条件だから。
- ・勉強の仕方がわからず、国試勉強に失敗してしまう学生には特に有効であると思う。
- ・研究データがあるらしい。
- ・歯科医師になるという意識があれば、勉強に打ち込む気持ちも表れるから。
- ・（一般的に）早期に手当することの必要性和効果が予想される。
- ・勉強はやみくもにやってもだめだと思う。導入教育を経て勉強方法や勉強習慣を身につけることが叶えば最終的な成果につながるはずと考えるから。
- ・学習に対するレディネスを早くから備え、集中する力をつけるため。
- ・国家試験の成績を意識したものにするなら関係が生じるかもしれない。

- ・専門教育の成果に導きを与えると考えられるため。ただし、専門教育の内容やカリキュラム構成が充実していないと導入教育が十分に生かされないと考える。
- ・学習方法・スキルの習得、人間関係面での安定感は「学び」への意欲を増すと思う。

「どちらでもない」

- ・直接関係があるとは思われません。導入教育で学生の意識が大きく変わるとは思えない。
- ・データを採取してみる必要があると思う。
- ・入学時動機が専門職を目指すことと合致していない場合があるので。
- ・証明がない。
- ・学生のイメージとは異なる学部である場合には国家試験の必要性すら疑われてくる。ドロップアウトの可能性もある。

4. 本学の教育力向上の方策として、どんな方法があると考えますか。

- ・現場では重要性より緊急性が優先される傾向にあります。それを改善することによって、重要度に徐々にパラダイムシフトするかもしれない。
- ・「面白い講義」の公開セミナーなど。
- ・教育環境の改善が第一である。
- ・講義に対するレクチャー（学生に評価が高い先生の講義を見学する etc.）
- ・教育力向上日（10/10の建学記念日など）を設けて全教職員に強制FDを実施する。
- ・教員の意識改革（3）
- ・マニュアル化、共通基準の設定
- ・状況の分析と目標・目的の明確化
- ・FD活動への意識の向上
- ・国試合格率の向上⇒学生の質の向上
- ・具体的な教育向上策の実例を研修してもらう。
- ・カリキュラムの見直し
- ・カリキュラムデザイン
- ・e-learningの導入
- ・問題意識の共有。研修会への参加
- ・授業内容及び講義の公開
- ・現在バラバラに実施されている導入教育の調査を実施し、再構築する。
- ・教育が日常的、継続的に学生の現状について語り合う場の設定
- ・能力別編成教育、少人数教育
- ・他学部の教員と話し、協力し合う。
- ・WS7で出たような方法で教員の意識を変える。
- ・教員に教育を行うことで、きちんと評価する。歯学部の臨床では診療、教育、研究の3つで評価され、教育だけに力を入れることが出来ないから。

- ・導入教育の充実と教員の意識共有のもとでの指導
- ・ほぼ全学共通の目標として国試合格があるという特性を活かし、そこに向けた学部間の競争をあおるのもひとつだと考える。
- ・導入教育を含め、教員による問題意識の共有、明確化
- ・文章表現指導を必修科目にする。
- ・教員のランキング評価（講義に点数をつけさせるとよい）→やられるとけっこう厳しいはず。
- ・自尊心を増加させ、自主性や積極性を持たせる。
- ・教員が学生の卒業時に身につける職業人像の共有をはかる。授業スキルアップ研修
- ・おもしろい、うまい授業の公開
- ・学生側ニーズのアンケートをとり、結果を反映させる。
- ・導入教育を導入することによる「現状把握」と「授業スキル」を得ること。

5. 今回のFD研修について

1) 内容の価値	きわめて	あり	いくらか	少ない	なし	無回答
	7	24	4	0	0	1
2) 内容の難易度	きわめて難	難	適当	平易	平易すぎ	無回答
	2	12	20	1	0	1
3) 内容の時間 配分	多すぎ	多い	適切	少ない	少なすぎ	無回答
	2	9	12	11	1	1

FDワークショップ総合評価

6. 今回のワークショップで良かった点

- ・他学部教員と知り合えた。（6）
- ・多様な意見を聞いた。
- ・具体的かつ実現可能な内容であった。
- ・導入教育を考えるきっかけとなった。
- ・講義を考える際のヒントになった。
- ・全学的な視野を持つことができる。
- ・自分の中で曖昧に考えていたことでも、話し合うことで具体的な形になる。
- ・導入教育の意義、役割がそれなりに理解できた。
- ・学生教育へのモチベーションが高まった。
- ・freshなideaが多くみられた。
- ・教員の多様性に触れることができたこと。
- ・問題意識が高まり、自分の頭が整理できた。
- ・課題がみつかった。

- ・意欲の向上に寄与した。
- ・幅広い意見交換ができた。（学部をまたいだ問題点を挙げる事ができた。）
- ・導入教育の必要性を認識して、将来に役立つと思われた。
- ・一見無駄とみえる時間の互いの交流時間の方が時に意味を持ち、助けてくれる関係になる。
- ・参加者教員の個性ある多様な視点からの教育へのアプローチが垣間見られた。
- ・他の専門領域の先生方の視点を知るよい機会になった。
- ・全員が和気あいあい一つのものを作ることが体験できた。
- ・現在の本学が抱える課題に直結していたテーマだった。
- ・導入教育の「意義」「必要性」「方法」
- ・特に学生側の視点が認識された点
- ・他学部の先生方との活発な議論ができたこと。
- ・導入教育について学ぶことができたこと。
- ・多く教員との出会いを持つことができた点と共通認識を持つことができたところ。
- ・参加した教員は導入教育について考えることができた。
- ・他学部の先生と議論できたことで、自分の考えが深まったこと。
- ・普段は忙しさを理由に考えないような内容を集中して一つの問題に取り組めた。
- ・他学部の教員とのディスカッション
- ・他学部の先生の考え方、教育の仕方について議論できたこと。
- ・自分がどのようにしていかなければならないかを考えることができた。今の状態ではあまりにも未熟すぎる事が再認識できた。グループ内の先生に恵まれ、考え方、姿勢を学ぶことができた。
- ・他学部の導入講義の実態を知ることができた。（2）
- ・いろいろな考え方、見方があることを知ることができ、視野を広げることになった。
- ・同グループの方々が大変熱心で誠実であり、実りのある議論ができた。
- ・小グループ学習法のマニュアルを整理できたこと。
- ・他学部の学生の様子がわかった。
- ・他学部の先生と知り合え、実情を知ることができた
- ・意識変化を促された。
- ・他の教員の方々の意見を聞くことができた。
- ・導入教育について具体的に理解できた。他学部の先生方との交流によって、先生方、他学部の状況など知ることができた。
- ・自分の考え方を整理する事ができたこと。
- ・他グループのものを含め「プロダクト」を得たことによって、自分の教え方へのヒントを得られたこと。

7. 今回のワークショップでの改善点

- ・テーマが一部（WS7）わかりにくい表現であった。
- ・お金をかけすぎている。経営状態と病院は赤字を聞いて不安になった。

- ・時間をもう少し欲しかった。
- ・項目を減らし、発表会で議論する時間を増やすべき。(全体討論)
- ・タスクフォースのすり合わせが不十分
- ・時間と事前のdateをもう少し多めにしたい。
- ・予習ができればもっと深まっただろう。報告書はブックレット化して出版すること。
- ・シラバス作成から15分間くらいの模擬講義を行なえばよかった。
- ・WSが多すぎてじっくり話し合えない場面があった。
- ・2日とも同じ班がよいのか。
- ・あらかじめ導入教育についての資料やなぜ必要かを説得する具体的資料の呈示があれば良かった。
- ・発表会場とWS会場を同一にしたい。時間短縮にもなります。
- ・PCの準備(台数増)→プロダクトも早く出来上がる。
- ・部屋割(成人女性の6名部屋は…どうでしょうか。せめてツインが望ましいのでは。そのことが、ストレスになり参加をしづる傾向がみられる。)
- ・WSによっては時間が足りない所があった。
- ・曜日は金曜、土曜日に設定してほしい。
一日は平日OK、一日は研究日OK、日曜は休日のため
- ・土曜日に行うのではなく、金・土、あるいはw e e k d a yを考えてほしい。
- ・この形式自体は悪くない。
- ・WSごとにやるべき事が具体的な感じがしなかった。
- ・成果がどのように活かされるのかが不明。
- ・少し時間が短かったので題数を少なくしてもよいかと思った。
- ・もう少し日本の大学における医療大の導入教育の現状をわかっていたら、改善点などをさらに詳しく討論できたかもしれない。
- ・事前に内容、情報を提供してほしい。(5)
- ・ひとつひとつのワークショップにかけられる時間が短くて残念だった。その結果としてQ1の「方法」に回答したような結果で終わってしまった。
- ・題目によっては漠然としすぎているもの、逆にもう少し自由が欲しいものがあったと思う。
- ・ネットサーチができない。大学でやるべき。1日の内容にすべき。国試は別問題も含むので別途の対策も必須。
- ・ディスカッションでのWSの間に息抜き、または再確認程度の講演が欲しかった。
- ・約束事は統一してほしい。(パソコンを使用するグループがあり、作業の不公平が生じたのではないか)。作業中の指示は初めてのところで統一してほしかった。
- ・二日日程で良い点も多いと思いますが、知力・体力を考えると、宿泊ではない二日日程の方が、生産性はあがるのではと思いました。

8. これからのFD研修でとりあげたい内容

- ・ 情報処理教育の強化
- ・ グループ学習の授業法
- ・ e-learning の活用（2）
- ・ PCの授業での活用（PC必携）
- ・ 教育（講義）技術（教育テクニク）の向上を目指して。
- ・ 学生との対応について。
- ・ 作問技術の向上のための研修（成績評価の力）
- ・ 卒後教育の方法論
- ・ カリキュラムデザイン論
- ・ 外部講師による講義も入れて（青学大 玉木欣也氏等）
- ・ 大学院への進学率
- ・ 国家試験対策（3）
- ・ 教室内でのマイクの効果的活用
- ・ 学生が聞きたい講義の形 アイコンタクト タイミング
- ・ 講義の仕方についての具体例
- ・ 現状分析のもと、必要と思われるものを中心に取り上げていく。
- ・ 講義中の話し方。効果的なスライド
- ・ 速効性のあるすぐに授業に使えるT i p sをレクチャーして欲しい。
- ・ 状況判断能力を身につけるには。（自分で考えて行動できるには。）
- ・ 全学教育
- ・ 学生が現在、何を望んでいるかアンケートを取り、その内容についてどう教育するか。
- ・ 教員のあり方、教員に求められること。
- ・ 様々な教授法（工夫や方策）について互いに公開、意見交換ができるようなもの。
- ・ これは！という導入教育を学生と一緒に受ける→ここからスタート
- ・ 学生の能力を引き出す方法
- ・ パワーポイントの上手な活用法（2）
- ・ よい講義のデモンストレーションを見ての研修
- ・

資 料

資料

資料1

導入教育とは

初年次教育、1年次教育、基礎セミナー、一般教育演習、フレッシュマンセミナー・・・

導入教育は、初年次教育、1年次教育とも呼ばれ、高校から大学へ円滑な移行をはかり、学習および人格形成に向けて大学での学問的、社会的経験を成功させるべく 主に新入生に向けて作られた科目で、いわば大学での学習方法を身につける科目 体験的に学ぶ。

大学における導入教育の成否は、それ以降の教育の効果を左右するといわれている。

アメリカ発

多様な入学生 → 目標とする学力

1972 サウスカロライナ大学 「大学101」フレッシュマンセミナー

目的：1) 大学への積極的な適応と同化の促進

2) 自己認識および自己信頼の向上＝自由と責任のバランスを学習

3) 適応学習、困難の処理、批判的思考、論理的解決

4) 学習の友人・グループ形成

5) 教員に対する姿勢

6) 教員の教授法を認識

7) 学生と教員の関係形成

8) 大学生活に関与

9) 指導者を見つけること

10) 合衆国について知る

11) 図書館、その他の施設利用法

12) 書面・口頭によるコミュニケーション能力

13) 健康

14) 学生個人の職業・学問専攻の目標をしること、その達成課程を知ること

15) 意志決定、目標設定、時間管理、チーム活動能力の訓練・・・

16) 特定の専攻への関与を促進

17) コンピュータリテラシー

18) 地域への関与

19) 大学が提供する機会の発見、学生の能力を開発することを援助していることを知る

フレッシュマンセミナーのシラバスにある出席に関する規則

1) 計画された授業回数のうち10%をこえた欠席（許可されたものであっても、なくても）は、過大で、教員は欠席状況に対して成績上の 패널ティを課することがある。

2) 3回の欠席はゆるされるが、それ以上になることが予期され留時は教員と論議する。
3回の欠席は 成績を一ランクさげる。

3) 時間厳守はビジネスでの成功の鍵である。学生が自己を発展させるために重要
3回の遅刻は1回の欠席とする。

大学における学習スキル generic skills を身につける

読み書き能力・数的処理能力・IT利用能力

情報収集能力、批判的思考力、論理的思考力、
コミュニケーション能力、チームワーク能力、責任感・・・などの能力を得る

授業を聞きながらポイントをノートにとれる、読んだものをノートにまとめることができる・・・
などなど

学生同士、学生と教員の人格的交渉も重視

一方、補習教育、補正教育はこれにいれない。

例

名古屋大 「名古屋大学新入生のためのスタディティップス①」
「名古屋大学新入生のためのスタディティップス②」 戸田山和久、夏目達也、ほか

山形大 「新入生の学習マニュアルーなせば成る！」 小田隆治、立松 潔、ほか

学校—生徒、大学と学生の違い

大学生は生徒ではない 生徒 学校で教育を受ける
学生 大学で主体的に学ぶ 学識ある市民になる

大学 = 知の共同体

学識 豊かな知識
知識と知識を結びつける能力
科学的考え方ができる
ひろい時間・空間感覚

学識は生き方
人類の知的遺産への畏敬
学ぶことへのたゆまぬ努力・・・これが生きる喜び
学んだことを生かす
人類の知的遺産を次代へ継承することへの誇り

学識ある市民になるために大学で学ぶこと
アルバイトやサークル活動にばかり没頭するのはもったいない
だが、学識ある市民になる機会をのがさない
学習活動・研究活動は大学でなければならない
大学の資源を最大限に有効活用

知への敬意
知はただでない
ただのりしない

他者への敬意

1. 授業から学ぶ

- 1) 大学の授業 大学は知の共同体
つまらないといって価値がない授業と決めつけない
- 2) 自分の学習時間割 学習意欲を高める時間割 シラバスの理解
- 3) 授業に出よう
授業時間になれる
授業によりルールが違う
教科書を買おう

- 4) 思考の整理に役立つノートをとろう
 - すべての授業にノートを用意
 - 正確に書く
 - 自分のコメント, 疑問を書きそえる
 - 復習のてがかり
 - 他人のノートをかりるのは命取り
- 5) 授業時間外の学習を大切に
 - 予習・復習 (単位の意味を理解)
 - 自分なりの課題を
 - 練習問題をとく
- 6) 自分の理解度をチェック
 - 学習の記録 振り返り わからないことは 質問

2. 本から学ぶ

- 本との出会い
- 読書
- ノート
- ほかの人と討論

3. 人から学ぶ

- あいさつから
- 仲間と議論
- 人と意見があわないのもいい経験
- 人と出会うチャンスを積極的に

4. 教員との距離を縮めよう

- 質問をおそれない
- 研究室を訪問

5. 仲間と学ぶ大切さを知ろう

- 学ぶ仲間づくり
- 授業でノグループワークに積極的に参加
- 学んだことを仲間と共有
- 自主的勉強会をもとう

6. 学習習慣をつけよう

- 学習中心の生活 学習時間の確保
- ちゃんと授業に出よう
- 毎日 机について勉強

学習の目標をたてる

- 目標を分解
- 目標はすぐ実行
- 達成度を自己評価

レポートを書く

- レポート
- 引用

発表の仕方

資料2

授業設計

各シラバスを以下のフォーマットを用いて、用意してください。

全学教育のうち、導入教育科目、教養教育科目、総合科目は、授業科目名と授題目名（内容を具体的にあらわす題名してください）

授業科目名

授業題目名

または

授業科目名

講義担当者名：○河合太郎 神童一郎
1年生 前期 必修 2単位

【概要】

科目名のみでは内容がわかりにくい場合、どんな科目かなどの内容を文章で説明をしてください。できるだけ短く、簡潔に説明してください。たとえば、「この科目は、看護学を学ぶ基本として、人体を理解するために必須の人体の仕組みと働きを学ぶ。」など、科目の趣旨も表現できます。文体は、以下も「である」体としてください。専門性との関連を説明することも効果的です。全体のカリキュラムでの科目の位置づけ、意義なども表現するとよいでしょう。ただし、長くならないように。

【学習目標】

ここでは、学生が授業を受けたて何ができるようになるかを箇条書きで表現します。一般目標と行動目標を箇条書きで表現してください。一般目標と行動目標は、専門用語ですので、この言葉はもちいず、はじめに2, 3の一般目標、うしろにいくつかの行動目標を順に表現します。表現にはつぎの原則をふまえてください。

- 1) 一般目標は、一般目標は学習の成果を、概念的に表現します。
- 2) 学生を主語として書きますが、主語は省略します。
- 3) はじめに、学習の目的を明らかにするために、「・・・ために、」をいれてください。
- 4) 目標分類（認知・態度・技能）を総括的に含め
- 5) 複雑な概念をもつ動詞、総括的な概念をもつ動詞をもちいて表してください。
知る 認識する 理解する 感ずる 判断する 価値を認める 評価する
位置付ける 考察する 使用する 実施する 適用する 示す 創造する
身につける
- 6) 行動目標は「理解する」のような概念的言葉でなく、学習の結果えられる成果を観察可能な行動を具体的に表します。試験（成績評価）を想定するとよい。
- 7) 一般目標と関連しているはずです。
- 8) 書く領域を全体にバランスよく含まれるようにします。
- 9) つぎのような、観察可能な動詞で、知識、態度・習慣、技能をわけて、到達レベルを表現してください。
また、各領域をバランスよく含めてください。以下で下段ほど、深いレベルです。

知識の領域

列記する 列挙する 述べる 具体的に述べる
説明する 分類する 比較する 対比する 類別する 関係づける 解釈する
予測する 選択する 同定する 弁別する 推論する 予測する 公式化する
一般化する 使用する 応用する 適用する 演繹する 結論する 批判する 評価す

態度・習慣の領域

行う 尋ねる 助ける コミュニケートする 寄与する 協調する 示す
 見せる 表現する 始める 相互に作用する 系統立てる 参加する
 反応する 応える

技能の領域

感ずる 始める 模倣する 熟練する 工夫する 実施する 行う 創造する
 操作する 動かす 手術する 触れる 触診する 調べる 準備する 測定する

【学習内容】

目標を達成するために、順に授業をすすめます。これは学生の学習計画でもありますので、各回の授業内容を具体的に表現します。目標達成のために多様な授業法を駆使します。

必要により学習資源も記入してください。教員も学習資源のひとつです。

授業方法もわかるようにします。宿題、中間試験も表現します。中間試験（形成評価）もおこない、互いのフィードバック（授業の仕方、学生の学習の仕方途中把握）も重要です。

以下の枠に表現してください。

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを把握する。	河合太郎 神童一郎
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

【評価方法】

評価の方法を書き、それぞれの割合を書きます。

たとえば、レポート 20%・学習態度 10%・中間試験 30%・定期試験 40%

さらに具体的なことを書いてもよい。

【備考】

教科書

注1) 導入教育には、体験型・小グループ・学生参加型学習

クラスサイズ

グループサイズは5から8名

一般には 15から20名程度がよい

3から4 グループにわけ

50名・100名クラスでも

5から8名ずつのグループをつくり、周到な設計で授業をすすめるいこともできる。

グループダイナミックスを重視

リーダーの役割：学習をコーチ、ガイドする。

コミュニケーションを促進する。

問題点の焦点を明確にする。

考えを明確にする。

交通整理をする。

グループ員の各自の能力を発揮させる。

要求されれば情報を与える。

学習を締めくくる。

(教師は前面にはでないで適切に助言する)

(学生間で問題解決していくようにリードする)

教員の役割：

教員は演出家、コーチである。

1) 授業のねらいを特定=授業デザイン

2) 学生をグループに

3) テーマと目標の説明

4) 作業 skill の説明

5) 到達度を評価

方法

解氷

アイディア

バズ討論

ブレインストーミング

KJ法

討論・思考の訓練

ディベート

問題解決訓練

ロールプレイ

フィッシュボール (金魚鉢)

場面

各種セミナー

グループ実験実習・フィールドワークの討論やまとめ

カンファレンス

発表者と参加者、参加者と参加者の討論

司会者と参加者とのコミュニケーション
インタビューの演習：モックインタビュー（記者会見の真似など）
インフォームドコンセント訓練
医療面接 訓練
接訓練
ロールプレイ（医師・患者・家族・看護師・・・、裁判官、検事、弁護士、被告・・・）
シミュレーション
モデル
模擬患者
一次救命蘇生術
基本外科手技
PBL

注2) 成績評価

試験にはつぎの2種があり、形成評価が重要

形成評価
総括評価

評価が持つべき特徴：妥当性・信頼性・客観性・効率性

評価方法と評価可能な行動

成績評価方法

試験にはさまざまな方法があり、判定可能な目標とそうでないものがある。また、それぞれの評価方法には、利点と欠点がある

授業目標の到達度を評価＝目標のないものは評価できない。

- 1) 論述試験
知識（想起）、理解（解釈）、問題解決能力
- 2) 口頭試験
知識（想起）、理解（解釈）、問題解決能力
- 3) 客観試験（国家試験、統一試験、CBT など）
主として知識の想起 および 単純な解釈、問題解決能力
- 4) シミュレーションテスト
問題解決能力
- 5) 実地試験
問題解決能力、技能、（態度＝試験のときだけよく見せることに注意）
- 6) 観察記録法（チェックリスト、尺度評価を用いる）
態度・習慣 および 技能
チェックリスト check list
評定尺度 rating scale
逸話記録 特記すべきことを記録
- 7) 論文 または 研究課題（レポート）
丸写しがあり、合否判定などには不向きだが、オリジナリティ、個性を評価すると伝えること
形成評価にもちいるのに有意義
- 8) ポートフォリオ (portfolio)
学習習慣・態度習慣・能力の進歩・資質・問題解決能力

アルバム



研修会場到着後、笑顔で記念撮影



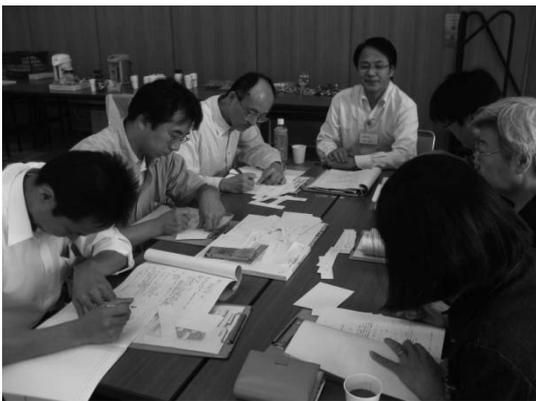
開会にあたって・・・



意気込みと緊張と・・・



グループ毎に、討論開始



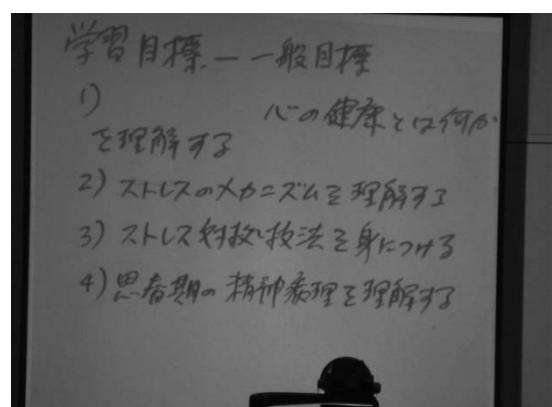
グループワーク：よ〜く考えて



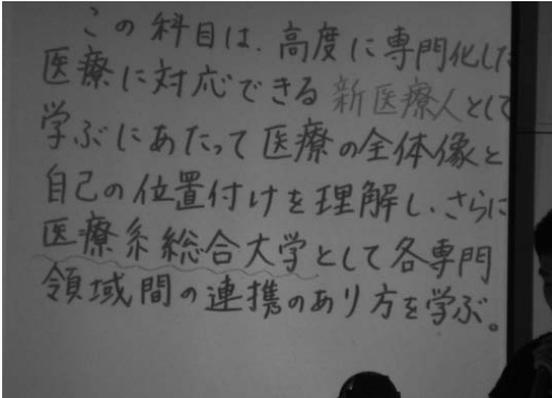
グループワーク：どこから手をつけようか



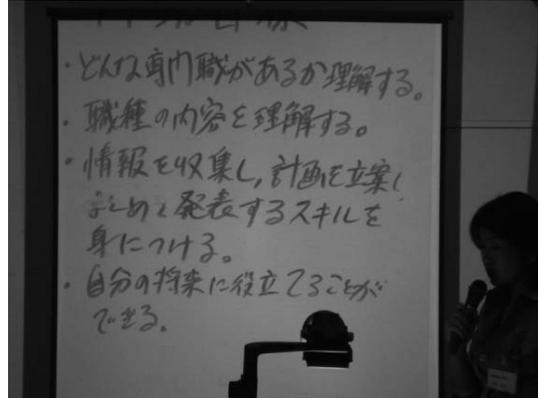
発表：大学における学習方法・態度とは何かを知る。



発表：一般目標—ストレスのメカニズムを理解する。



発表：医療の全体像・自己の位置づけの理解と専門領域間の連携の在り方を学ぶ。



発表：専門的職業人を目指すために・・・



ほろよい懇談会 疲れもどこかへ！？



貴重な意見交換会



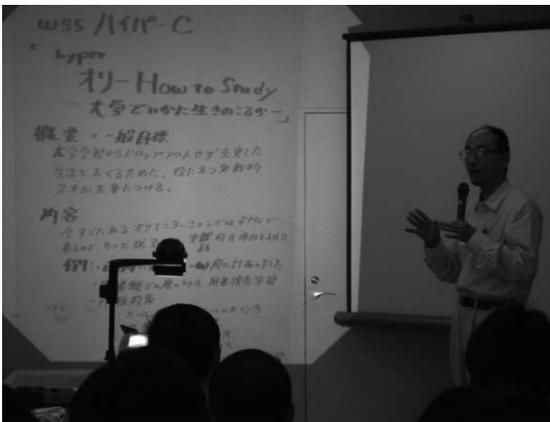
授業中の帽子への対応・指導 について考える



今日、取り組む内容は・・・



では、WS 5 からスタートしましょう



発表：導入教育の授業設計—大学でいかに生き残るか。



発表：導入教育のマニュアル化（小グループ学習法）



最後のまとめは・・・

発行 平成20年3月

北海道医療大学FD委員会

委員長：阿部和厚

委員：有末 眞・及川恒之・小澤次郎・関崎春雄・東城庸介・中澤 太・中野倫仁・
花岡真佐子・樋口孝城・横山登志子・和田啓爾・沢辺千恵子・長田真美
飛岡範至・水野 誠・嵯峨由紀美（事務局）

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

Phone:0133-23-1211（代） Fax: :0133-23-1669



北海道医療大学

Health Sciences University of Hokkaido

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

TEL : 0133-23-1211 (代表)

ホームページ : <http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/>